

少子時代の親子の世界

馬居政幸



灯台ブックス113

灯台ブックス

113

少子時代の親子の世界

馬居政幸

第三文明社



9784476021134



1925037008005

ISBN4-476-02113-1

C5037 ¥800E

定価 本体800円 +税

第三文明社

少子時代の親子の世界

馬居政幸



灯台ブックス113



子育てにとまどうお父さんや
お母さん、そして子どもたちの
健やかな成長を願う全ての人たちに、
四人の子どもたちに学んだ“元気の素”をお届けします。

まえがき

家庭の教育力が低下している、という話をよく聞きます。そのためか、子育てをテーマにした講演会で非常に熱心にメモを取りながら聞いておられたお母さんから、講演終了後に自分が子育てに向いていないのでは、と相談され驚くことが少なくありません。あるいは、子育て講座に積極的に参加するお父さんにお会いの機会が多くなりました。そのことは喜ばしいことなのですが、すこしひねくれた見方をすれば、それだけ父親としての自信を持つていない、ということになるのかもしれません。

しかし、本当に昔の家庭は立派で親は自信満々だったのでしょうか。実は昔も自分は母親として失格なのでは、と悩む女性はいたのですが、姑の目と口を気にして言えなかつただけのことではないでしょうか。父親の場合はもっと単純です。子育てを自

まえがき

分の役割と思わなかつただけかもしません。「貧乏人の子だくさん」という言葉に

象徴されるように、次々と生まれる子どもを食べさせるだけで精一杯、どのように育てるかといったことを悩む余裕がなかつた、というほうが正確かもしません。

逆に、「少なく産んで、良く育て」ようとするからこそ、子どもの育て方が問題になるわけです。家庭の教育力低下や親の子育て不安が話題になるということは、むしろ、現代の家庭には教育力を高める可能性があることを示唆しているともいえます。全く可能性のないところを問題にしてもしかたがないわけですから。良くなろうとするから、不安も生じます。自信がないから、努力も生まれるわけです。

少なくとも、現在、大学二年（長男）、高校一年（長女）、中学二年（次男）、小学校六年（次女）の子どもの母親である私の妻は、自信があつたから四人の母親になつたのではありません。特に、長男のときは不安のみであつたと思います。

長男が小学校に入学する前のことです。一緒にテレビの報道番組を見ていた妻が、静かに、しかし力強く情感をこめた声でつぶやきました。

「そうだよね、よくわかるわ、私だつてこうなるかも……」

若いお母さんが子育てに悩み、自分の子どもを傷つける、という内容でした。

逆に、もし、一人か二人の子どもを夫婦のみで育てているにもかかわらず、子育てに自信があるといわれる方がおられたら、私はそのこと自体に不安を抱きます。あるがままの現実を受け入れ、それを素直に表現できることが子育ての基本であり、未経験な親の思いに応えて行動してくれるほど、子どもは甘くないからです。

おしめをかえ、風呂に入れ、乳を飲ませることを毎日繰り返すことがどれほど重労働か。おまけに、そのような親の苦労を全く意に介さず、勝手気ままに泣き叫び、ところかまわずひつかさまわすのが子どもです。わが子、とりわけ最初の子ほど、『理不尽』という言葉が似合う存在はない、というのが四人の子どもたちと格闘してきた私のいつわらざる実感です。

やはり長男が二歳になつた頃のことです。近所の焼き肉屋さんに親子三人で食事に行き、並んだ料理に箸をつけようとしたその瞬間でした。長男が突然私の膝を踏み台

にしてテーブルの上にはい上がりカルビクッパが入ったどんぶりをひっくり返したのです。それからの騒ぎは想像できるでしょう。飛び散つたご飯と汁、泣き叫ぶ長男、悲鳴をあげる妻……・食事どころではありませんでした。多分、読者の中にも同じような経験をした方も多いと思います。

最近の親は、と家庭教育の現状を批判する言葉や文章に出合うたびに、私はこの時の気分を思い出します。そしてその内容が子ども二人を夫婦のみで育てること、すなわち「少子時代」の子育ての経験を踏まえたものでなければ無視します。

でも、なぜそんなに大変なのに、一人ならともかく四人も子どもをもうけたのか、と疑問に思われる方もおられるでしょう。その答えは簡単です。苦しくて、いやなことはいっぱいあるけど、楽しくて、うれしいこともいっぱいあるからです。本当に子どもを育てている方であれば、子育てに不安を持たないほうがおかしいと思います。でも、それでも子どもは可愛いのです。むしろ逆かもしれません。自信を失いがちな私ども夫婦に『元気の素』を贈り続けてくれたのが、子どもたちでした。

」のことを伝えたくてこの本を書きました。

時代と社会が大きく変わりつつあります。子育てが困難な社会であることも否定できませんでしょう。でも、だからこそ得られる喜びもまた大きいと考えます。その醍醐味を「少子化」を切り口に解きほぐしてみました。これが第一部です。

本書は理想的な子育ての方法を説いたものではありません。命を与えるきっかけをつくつたのは私と妻ですが、夫婦から父母へと成長させてくれたのは四人の子どもたちのほうです。その六人の親子の生きる世界を綴つたのが第二部です。

子育てに模範回答はありません。私ども夫婦の拙い経験を、読者の皆さんがあれぞれ素晴らしい親子の世界を描くための一助にしていただければ幸いです。

子育てにとまどうお父さんやお母さん、そして子どもたちの健やかな成長を願う全ての人たちに、四人の子どもたちに学んだ『元気の素』をお届けします。

平成九年八月十二日

著者



◎目次——少子時代の親子の世界

まえがき…… 3

I 難しい少子時代

- (1) 子どもと高齢者並ぶ…… 17
- (2) 巨大な発行部数…… 22
- (3) 子どもが半分になる…… 26
- (4)なぜ少なくなったのか(1)…… 33
- (5)なぜ少なくなったのか(2)…… 39
- (6)何が変わったか…… 45
- (7)みんな高校や大学へいくようになつたけれど…… 50
- (8)何が失われたか…… 54
- (9)自立のために必要な力は…… 63

II 新しい親子の世界

- (1)男女の自立への道は…… 71
- (2)ジャンプワードの秘密…… 80
- (3)女性が産まない理由…… 85
- (4)子ども同士の豊かな関係を…… 95
- (5)変化する「学校のモノサシ」…… 100
- (6)親の役割は「モノサシの発見」…… 103
- (7)どんどん変わる子どもの能力…… 106
- (8)「反抗」は正常な成長の証拠…… 109
- (9)創造し続けよう「親子の関係」…… 113
- (10)懸命に生きる姿のモデルに…… 116

(8) 互いの違い認め秩序づくり……	119
(9) 情報を共有、役割を明確化……	122
(10) それぞれの家庭に独自の形……	125
(11) 右往左往した一、三十代……	128
(12) “異質”との交わりが成長の契機……	132
(13) 父親の姿が見えていますか……	135
(14) 子どもとの“距離”を短くする工夫を……	138
(15) 願いを形容詞に託して……	141
(16) 正月は絶好の機会……	144
(17) 上がらぬ出生率、時代が求めるものは……	148
(18) アジアに育つ若い力……	150
(19) 家族はどうかかわるか……	154
(20) 看板、ゴミ箱、大型遊具……	157
(21) 仲間づくり、ストレス発散の効用も……	160
(22) “総合性”、“創造性”、“自主性”……	163
(23) 親のネットワークから……	166
(24) 学歴社会と日本型経営が崩壊へ……	170
(25) 大きな理想に生きる豊かな時間を……	174
参考文献……	178
あとがき……	179

I

難しい少子時代

●装画・記事中イラスト・山県和彦／装幀・高久省三

(1) 子どもと高齢者並ぶ

今年、平成九年（一九九七）は、多分、日本社会における子どもの問題（歴史）を考えるうえで、記念（？）すべき年になると思います。その理由は次に紹介する今年の五月五日の朝日新聞朝刊の囲み記事の見出しだけです。

「子ども 高齢者 背比べ並んだ」

毎年、子どもの日の新聞には、その年の子どもの現状（問題）を象徴する話題が取り上げられます。平成九年は子どもの日にふさわしく「背比べ並んだ」と表現したわけですが、いったい子どもと高齢者の何が並んだのでしょうか。囲み記事の冒頭、次のように問題が指摘されています。

「『子どもの日』にちなみ総務庁が四日付で発表した四月一日現在の全国の子ども（十五歳未満）の推計数は千九百五十二万人で、前年同期より三十二万人減少した。

(1) 子どもと高齢者並ぶ



平成9年5月5日付 朝日新聞朝刊



取り上げられるのを見たり聞いたりした方は多いと思います。でも案外自分の家族は問題ないと思っている方も少なくないのでないでしようか。それでも、高齢社会の問題については、親の介護や自分自身の老後の問題との関連で関心を持つ方は多いと思います。しかし、子どもの減少についてはどうでしょうか。

七年前の平成二年（一九九〇）に「一・五七ショック」という言葉が流行語になりました。これは一人の女性が生涯に産む子どもの数の平均値である合計特殊出生率が一・五七になつたことが原因でした。そ

六十五歳以上の高齢者人口は前年同期より七十一万人増え千九百四十四万人になつており、総人口に占める子ども人口の割合一五・五%と高齢者人口の割合一五・四%がほぼ並んだ。子ども人口の減少傾向に歯止めがかからず、少子高齢化社会の到来が加速している」

「並んだ」のは背の高さではなく総人口に占める割合です。これは、いうまでもなく並んだこと自体ではなく、子どもと高齢者の比率が逆転することを強調することが目的です。この記事が四月一日現在の推定データに基づくものであるため、既に本書が読者の手に届く頃には両者の比率は逆転している可能性が高いでしょう。今年は日本史上初めて、六十五歳以上の高齢者が十五歳以下の子どもよりも多くなるわけです。これが記念すべきといった理由です。それは超高齢社会への歩みの真っただ中に私たちの生活が入つたことを意味します。

でもなぜ子どもと高齢者の比率が逆転することがそんなに問題なのでしょうか。

新聞、雑誌、テレビなどマスコミを通じて、少子社会や高齢社会が“問題として”

してそれ以後、子どもの数が激減していることが大きな社会問題になつてきました。でもなぜ合計特殊出生率という舌をかみそうな名前の数値が下がることがそんなに問題になるのか不思議に思つている方もおられるのではないでしようか。あるいは、子どもを産む産まないは自分で決める問題、政府がとやかくいうことではない、と憤慨している方もおられるでしよう。

なかには、かつての戦争と結びついた“産めよ増やせよ”という国家の号令と重なつて聞こえる年配の方もおられるかもしません。

そこまで考えなくとも、子どもが減ったといつても、それは社会全体のこと、少なくとも我が家には二人いるから心配ないね、と安心している方はおられないでしようか。逆に子どもが一人なので少し不安に思う方もおられるかもしません。

結論からいえば、わが子が一人であろうと二人であろうと、さらには私のように四人であろうと、現在の日本社会で子どもを育てる限り、問題は同じです。

なぜでしようか。この問いに答える前にもう一つ問題を提起します。子どもが減つ

たといながら、毎週月曜日には『少年ジャンプ』、水曜日には『少年マガジン』と『少年サンデー』、金曜日には『少年チャンピオン』が駅のキオスクやコンビニエンスストアの雑誌コーナーに山のように積まれてるのはなぜでしようか。

本書の読者の中には、「マンガばかり読まないで少しは勉強しなさい」と、お子さんを叱しかつた経験がある方も多いと思います。いくら叱つてもやめないわが子の未来に不安を覚えている方もおられるのではないかでしようか。

これも結論からいえば、お子さんの未来を信じてあげてください。少なくともマンガを夢中で読むこと自体は、全く心配ありません。むしろ、マンガに興味を示さずには勉強ばかりしている子どものほうが問題です。なぜでしようか。

一方で子どもの数は急激に減少しています。他方で、子どもを対象とする週刊マンガ雑誌の発行部数は、全部合わせれば一千万部を超すはずです。この一見矛盾する二つの事実の背後に、現代の子どもの育ちの世界に生じている変化と問題を読み解く鍵かぎがあります。それを明らかにすることから、私たち大人が今後子どもたちとのよう

にかかわりあればよいのかについてこれから考えてみます。

(2) 巨大な発行部数

そこでまず子どもの減少の原因について述べる前に、マンガ雑誌と子どもとの関係について整理しておきます。実は、私は四年前の平成五年（一九九三）に、このテーマに基づいて、『なぜ子どもは「少年ジャンプ」が好きなのか』という本を出版しました。詳しくはこの本をお読みいただきたいのですが、その中からマンガ雑誌と子どもとの関係を最も端的に示す数字を一つ紹介します。

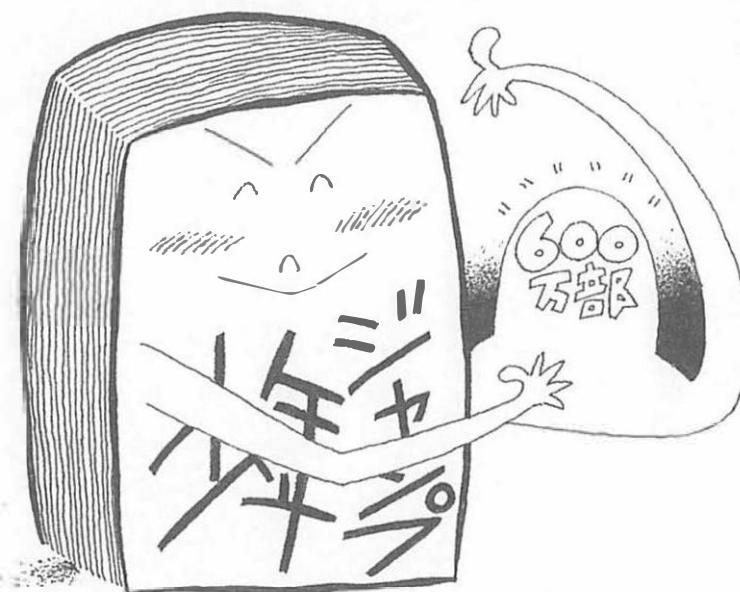
それは“六〇〇万”という『少年ジャンプ』の発行部数です。

私の知る限り、少年マンガ雑誌一誌の発行部数の最高値は、平成五年正月に発行された『少年ジャンプ 五・六合併号』の表紙を飾った「おかげさまで新記録！ 発行部数六三八万部突破記念！」という数です。ただし、このようにわざわざ正月号のキ

ヤツチコピーに用いているということは、他の号ではこれより少ないということでしょう。また、翌年の正月合併号の表紙には発行部数は書かれていませんでした。さすがのジャンプもこの年をピークに減少傾向に入りました。特に最近では、再び『少年マガジン』が王座を取り返したようです。

しかしここでの課題はどの雑誌が売れているかではなく、最高値の六〇〇万という数値の子どもにとっての意味です。

一般に“ジャンプ六〇〇万部”といわれるよう、少なくとも平成五年をピークに、数年間のあいだ六〇〇万を前後する数の



(2) 巨大な発行部数

『少年ジャンプ』が、毎週月曜日に全国の書店やコンビニエンスストアあるいはキオスクを始めとする駅の売店に積み上げられ、そのほとんどが火曜日をまたずに売り切れていたことは事実です。

一口に六〇〇万といいますが、これはすごい数です。たとえば、『少年ジャンプ』の本来の読者層は小学校高学年から中学校の男子ですが、その年齢にあたる十～十四歳の男性人口は、六〇〇万部を突破した一九九三年時点では約四百三十八万人でした。ということは、『少年ジャンプ』発行部数は本来のマーケットを構成する全人口を超えていたわけです。明らかに『少年ジャンプ』読者層は女性も含めた少年以外の層に広がっていたといえます。

もちろん、これは『少年ジャンプ』に限るものではありません。電車の中で堂々とマンガ雑誌を広げて夢中で読みふけるサラリーマンが珍しくないよう、マンガ雑誌の読者層の年齢の幅がかなり広がっていることも事実です。加えて、マンガは通常回し読みされますので、発行部数がそのまま読者数ではなく、実際に『少年ジャンプ』

を始めマンガ雑誌を読んだ人の数は想像を絶する数字になるでしょう。

ちなみにわが家では、平成五年当時、『少年ジャンプ』を買ってくるのは小学生の次男、金を出すのは私。その一冊の『少年ジャンプ』を高校生の長男と中学生の長女と小学生の次男と次女の四人の子どもたちと私（大学教師 昭和二十四年生まれ）が奪い合って読みました。それを横目でばかにしながら見ていて妻（元高校教師で専業主婦 昭和二十七年生まれ）も、昼間の空いた時間に読んでいたようです。

要するに、六〇〇万という数字の意味は、ややオーバーに表現すれば、「二十世紀末に日本という国に生まれた男子のほぼ全員が人生の一時期に『少年ジャンプ』というマンガ雑誌を毎週読んで成長（？）している」ということです。

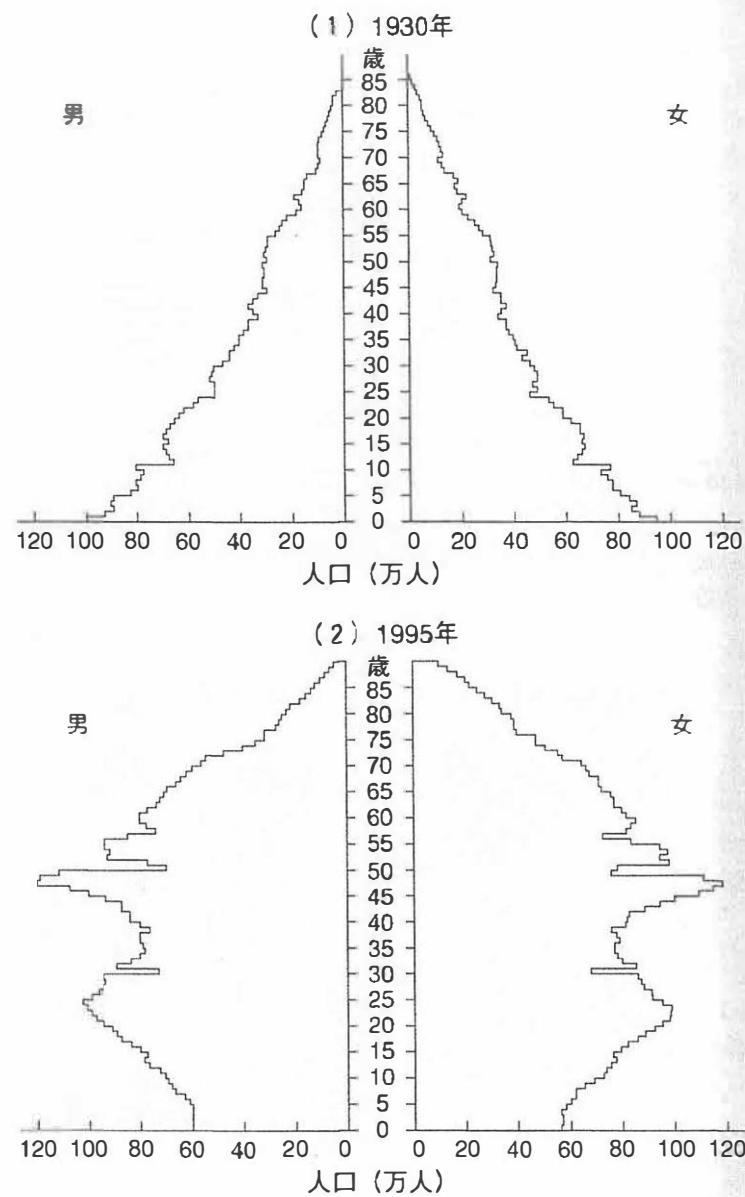
加えて、わが家がそうであるように、『少年ジャンプ』はその名に反して、女性の読者や四十年代後半に入つた大人である団塊の世代をも読者に巻き込みました。これは世代間のみでなく異世代間、とりわけ親子のコミュニケーションツールとしての役割を『少年ジャンプ』が果たしていることを意味すると考えます。そして、このこ

とが先に、マンガを夢中で読む子どもよりも、マンガを読まない子どものほうが心配といった理由の一つです。この点についてはあとで改めて考えますので記憶してください。

さて、今でこそこのように巨大としかいよいのないマンガ雑誌の発行部数ですが、もちろん一朝一夕にそうなったわけではありません。特に昭和三十四年（一九五九）創刊の『少年マガジン』や『少年サンデー』に遅れること九年、昭和四十三年（一九六八）に創刊された『少年ジャンプ』創刊号の発行部数はわずか一〇万部でした。それが二十数年で六〇〇万部、実に六〇倍です。この間に何があったのでしょうか。その秘密を解く鍵の一つが、実は子どもの数の変化なのです。

(3) 子どもが半分になる

図一1の真ん中の(2)図を見てください。これは平成七年（一九九五）の日本の男



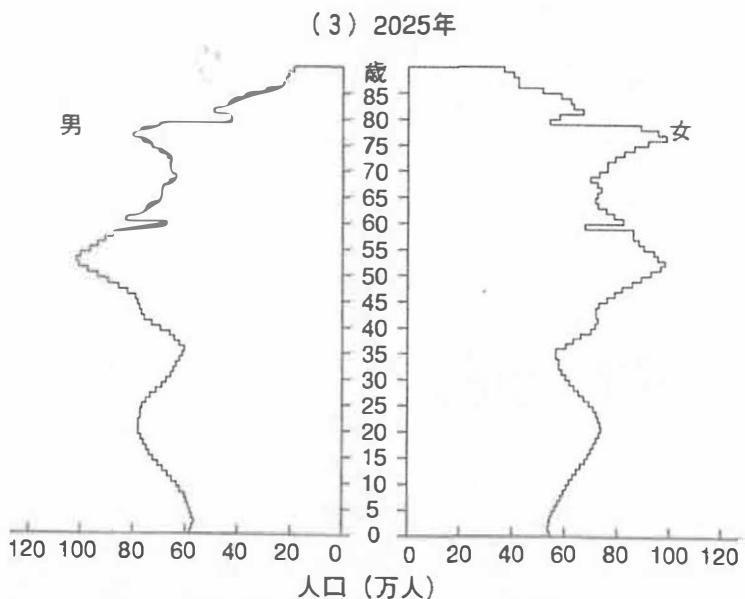
(3) 子どもが半分になる

急激に下がります。人口が減少していることを意味するわけです。もつとも、この図は二年前の人口に基づくピラミッドですので、二つの山は現在それぞれ二年だけ上のほうに移動しています。そして、二つ目の山の下りはほぼ垂直におりています。そのことを予想させるのが《図一2》です。

《図一2》は、昭和二十二年（一九四七）以後、一年ごとに生まれた子どもの総数を棒グラフで示し、先に紹介した合計特殊出生率を折れ線グラフで示した図です。

棒グラフのほうをみると、昭和二十二～二十四年（一九四七～四九）には、毎年二百七十万人近い子どもが生まれていることがわかります。これがこれから五十年代に入つていく団塊の世代です。《図一1》—(2)図の一つ目の山です。

この世代のあとは子どもの数が一度急激に減りますが、昭和三十年代半ばになつて再び増えはじめ、昭和四十八年（一九七三）には二百九万人の子どもが生まれています。これが現在二十代半ばになつた団塊ジュニアです。《図一1》—(2)図の二つ目の山です。そしてこの世代のあとは再び急激に減つて、^{つい}に一昨年は百十八万人になつ



総務省統計局「国勢調査報告」及び人口問題研究所「日本の将来推計人口」(平成4年9月推計)による。

資料出所：「人口統計資料集」厚生省人口問題研究所

女別人口を五歳ごとに区切つて図示したものです。一見してわかるように、日本の人口には一つの山があります。最も高い山、すなわち人口が多いのが四十代後半です。いわゆる団塊の世代と総称されている人たちです。そして、この世代の子どもたちを中心とする人口の山が二十代前半にあるもう一つの山になるわけです。これが団塊ジュニアとよばれている人たちです。

この団塊ジュニアのあと、山は

てしまつた、というわけです。

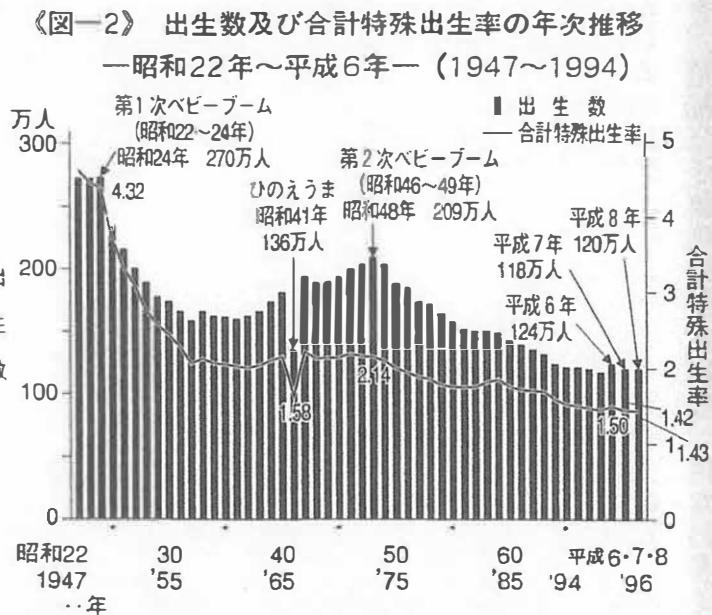
次に合計特殊出生率の変化を示す折れ線グラフのほうを見てください。最も多く子どもが生まれた昭和二十四年（一九四九）は四・三二です。それ以後は急激に右下がりになつて、人口が減少しない最低ラインとされる二・一（正確には一・〇八）の線まで減ります。しかし、昭和三十年代から四十年代にかけては、丙午の年の昭和四十一年（一九六六）を除き、二・一の線を前後する位置で平行して進むグラフになっています。それが、団塊ジュニアが生まれた後の昭和五十年代から再び右下がりになり、それ以後六十年代も減り続け、平成二年の「一・五七ショック」を経て、平成七年（一九九五）は終に一・四二になつてしまつた、ということです。

もつとも、昨年（平成八年）は百二十万人とやや増えましたが、親の数が増えた結果で（団塊ジュニアがいよいよ子どもを産む年代になつてきたため）、合計特殊出生率に変化はないようです。

ちなみに、平成八年に生まれた子どもの数百十八万人を昭和四十八年に生まれた子

どもの数二百九万人と比較しますと、
118.4・209.4・0.56、すなわち半分近くになつてしまつたわけです。さらに昭和二十四年と比較すれば、118.4・270.4・0.46ですので、半分以下で六割近く減少していることになります。

この傾向は現在二十歳代になつた団塊ジュニアが、自分たちの子どもを産む時期になるまで続くことが予想されます。既に、先に述べましたように、わずかながらも平成八年（一九九六）に生まれた子どもの数が前年より増えたのは、団塊ジュニアの一部が親にな



資料出所：財団法人 厚生統計協会「平成8年 最近の人口動態」より作成

つたためとみられます。ただし、合計特殊出生率はほとんど変化がなかつたため、今後も大幅な子どもの増加は期待できないと予測されています。そのため、厚生省社会保障・人口問題研究所は将来推計人口を再検討し、下方修正した結果を本年（平成九年）一月に発表しました。このことについては、IIで紹介します。

ところで、このように生まれる子どもの数が非常に少なくなることを少産化といいます。その結果生じる子どもが少なくなる社会を少子（化）社会とよぶわけです。

でも、それにしてもなぜ少子化が進む社会は問題なのでしょうか。

もう一度《図一-2》の折れ線グラフを見てください。合計特殊出生率は既に昭和三十年代に二・一を前後する値になっています。これは一人の女性が生涯に産む子どもの数の平均がほぼ二人になつてから既に久しいことを示します。もつとも、合計特殊出生率は、未婚の女性も含めた子どもを産むことができると思われる年齢の女性全体の平均値ですので、二・〇を切ることが日本の家庭の中に子どもが一人になつたことを意味するのではありません。それでも、昭和三十年代の半ばには、日本の多くの家

子どもが二～三人になつていたと考えても間違いはないと思います。

いいかえれば、日本の社会の少子化は、まず家庭の中の子どもの数が減少することから始まりました。私はこれを社会全体の少子化と区別するために家庭内少子化と呼びます。この家庭内少子化は、団塊の世代以後の昭和二十年代後半から三十年代にかけて急速に進んだわけです。しかし、団塊の世代とその子どもの団塊ジュニアの数が非常に多かつたために、社会全体の子どもの数はそれほど減少したようにはみえませんでした。それが団塊ジュニア以後、ということは、団塊の世代以後に生まれた少年家庭の子どもが親になって子どもを産む段階に入つたときに、いよいよ社会全体の子どもの数の減少がだれの目にも明らかになつたわけです。

(4)なぜ少なくなつたのか(1)

以上のことから、日本の社会の少子化は最近急に生じた現象ではなく二つの段階が

(4)なぜ少なくなったのか(1)

一九八〇年前後に始まり、九〇年代の現在も進行中の社会全体の少子化です。

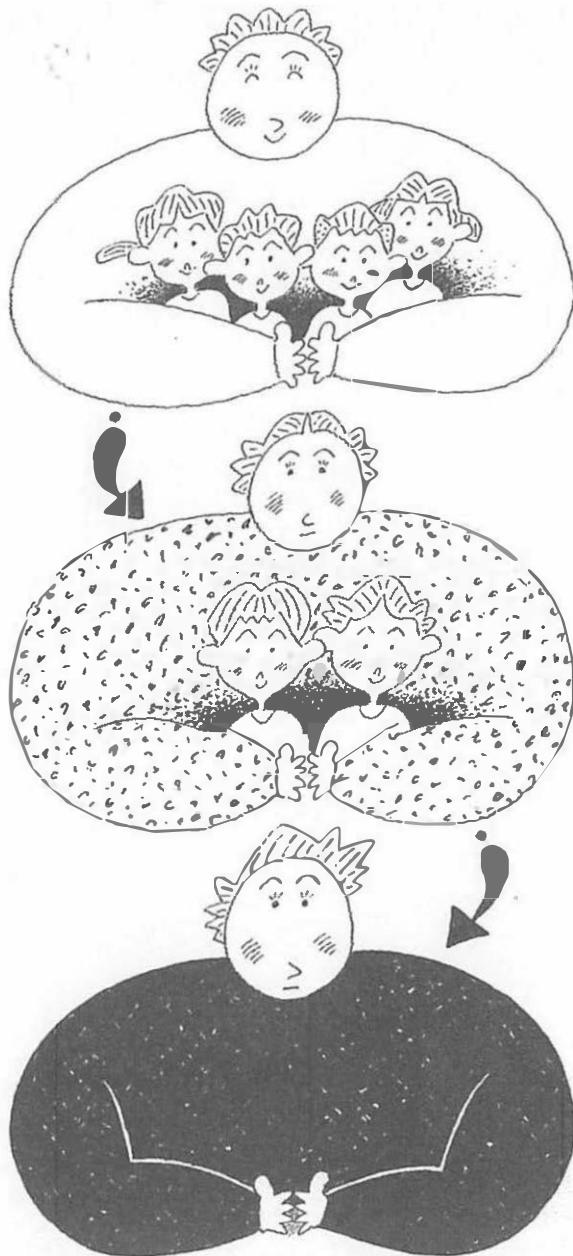
ただし、この二つの少子化は子どもの減少という点では同じですが、その減少の理由が異なることに注意しなければなりません。すなわち、最初の少子化は、一人の女性が産む子どもの数が四、五人であつたのが平均二人になつたことが原因です。それに対して二回目の少子化は、子どもを産む女性の数が減つたことが原因です。

まず一つ目の少子化の背景ですが、戦後日本の人口政策は、現在とは逆に“子どもを減らすこと”で始まりました。貧しい農業中心の日本を豊かな工業国に転換するため、各家庭が「貧乏人の子たくさん」から「少なく産んで良く育てる」ようになることが重要とされたわけです。そのため、昭和二十年代後半から三十年代にかけて、子どもを計画的に生み育てる「産児制限」や「家族計画」を奨励する運動が盛んに行われました。その運動の成果かどうかは別として、結果として昭和三十年代半ばには若い男女が出会つてつくった家庭の多くは子どもが二人から三人になりました。

実は、一般に“工業化”が進みますと、子どもの数は減少します。

あることが理解できるはずです。

その一つ目が、昭和三十年代に始まった少産化に伴う家庭内少子化です。その二つ目が、昭和五十年代後半から六十年代を経て平成の時代にいたる段階、いいかえれば



まず、工業化とは農業中心から工業中心に変わることですから、人口が農村から工場のある“都市”に移動することを意味します。そしてその移動（集団就職、都市の大学への進学など）した若い男女がつくった家族が“核家族”です。

さらに工業化は“高学歴社会”をもたらします。工業化を進めるには科学・技術を継続的に革新することが必要だからです。そのためには、科学・技術者を育成しなければなりません。また、だれの子どもに生まれたから偉くなるという社会ではなく、本人の実力で競争する社会にしなければなりません。これらを保障する仕組みが学校です。そのため、学校での教育をより長く、より高度にすることが求められます。戦後の日本の場合は、まず、戦前は全体の一割から二割の子どもしか進学できなかつた中学校を全員が入学できる義務教育にしました。次には高等学校にもだれもが進学できるようにしました。そして大学にもできるだけ多くの人たちをいけるようにしました。

したがって、工業化、都市化、核家族化、高学歴化はすべてセットになるわけです。

しかし、たくさんの子どもを夫一人の給料で大学まで出すことは困難です。子育てを助けてくれる身内は田舎にいるため、母親一人で多人数を育てるのも大変です。おまけに都市の住宅事情は良いとはいません。

以上のような理由から、都市の核家族は“少なく産んで良く育てる”という方向に進まざるをえなくなります。日本も昭和三十年代から四十年代にかけての高度経済成長の時代に、このような家族の変化が定着しました。

ところで、一般に合計特殊出生率が二・〇八であれば、人口は安定しているといわれます。女性の大多数が二人の子どもを産み、なかには三人産む方もいるという社会です。何らかの事情で子どもを産まない女性がいたり、亡くなる子どももいるため、二・〇だと人口が減ってしまうからです。

そして、日本の場合は、『図一2』で見ましたように、ほぼ二・一で高度経済成長の時代を乗り切りました。ですから、日本のさまざまな政策は、日本の人口が一定であることを前提にして作られています。企業活動も同様です。

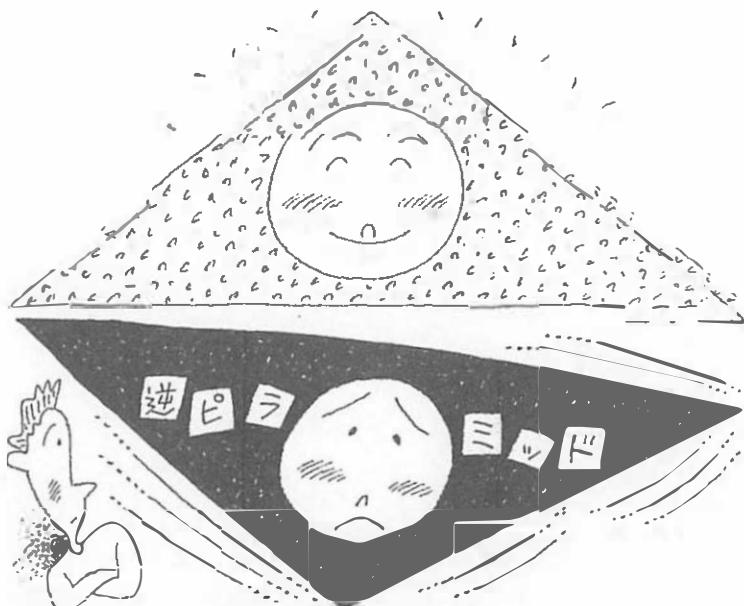
(5)なぜ少なくなったのか(2)

せつかくうまくバランスがとれていたのに、なぜ二回目の少子化が生じてしまったのでしょうか。結論をいいますと、一人の女性が産む子どもの数が減ったのではなく、結婚をためらう女性が増えたからです。

一回目の少子化が生じた時代、すなわち昭和三十年代の日本では、女性はすべて結婚をして子どもを産むことが当然とされていました。この時代は先に述べましたよう

生数のはうは、先に計算しましたように、半減しました。もしこのままいりば、団塊の世代が高齢期に入る三十年後は、今年生まれた子どもが三十歳になるですから、最もエネルギーにあふれた三十代の人たちが半分になるわけです。そのときには団塊ジュニアも五十代です。日本の二十一世紀は老人の世紀になってしまいます。これが急激な少子化が問題にされる理由です。

(5)なぜ少なくなったのか(2)



改めて《図-1》を見てください。日本の経営システムの中心にある終身雇用や年功序列は、一九三〇年(1)図の人口ピラミッドのように、豊富な若年労働力があるこそ可能な就労システムです。ちなみに一九九五年(2)図の団塊の世代より上を見てください。一九三〇年と同様にピラミッド型になっているはずです。団塊の世代が日本の高度経済成長を支えた若年労働力であったことが理解できると思います。

ところが、二回目の少子化、すなわち昭和五十年代になると、再び合計特殊出生率が落ち始め、現在は一・四二。子どもの出

(5)なぜ少なくなったのか(2)

どもを高校は当然として、できれば大学までいかせることを目標に、とりわけ家を継ぐ長男を大事にしながら、勉強中心に育ってきたのが昭和三十年代半ば以後に子どもを生み育てた専業主婦の生き方ではなかつたでしょう。

そして、このような家庭で育つた子どもたちが、大人になつて結婚をし子どもを産む年代になつたときに、一回目の少子化が生じたわけです。いいかえれば、現在の少子化は、昭和三十年代から四十年代にかけての少子家庭で、サラリーマンの父と専業主婦の母のもとに生まれ育つた最初の世代

に工業化が進行しました。それは父親がサラリーマンになり母親が専業主婦になることを意味します。性別役割分業の世界です。男が外で働き、女が家事育児を担うという性別役割分業は日本の伝統のように思われていますが、実際には昭和三十年代から四十年代にかけての経済の高度成長とともに一般化した習慣なのです。

高度経済成長以前の日本は働いている人の半分が農業を中心とする第一次産業に従事していました。農業中心ということは、男も女も働いていたことを意味します。夫婦の一方が家事と育児に専従できるほど豊かでも暇でもなかつたわけです。まさに貧乏人の子たくさん、生きることに精一杯で、次々と生まれる子どもの食べるものを用意することだけでエネルギーの大半が費やされました。

しかし、高度経済成長による豊かさが社会全体に浸透するとともに、お父さんが家の外の会社や工場に勤めて、お母さんが家事と育児を専門に担うという性別役割分業が一般化していったわけです。そしてこの時代は先に述べましたように都市化と高学歴化が進行する社会でもありました。仕事一筋の夫の生活のすべてを支え、二人の子



の女性が、結婚を拒否もしくは延期していることから生じた現象なのです。

なぜ結婚をしない（延期する）のでしょうか。仕事と家庭の両立に疑問をもつたからです。あるいは、専業主婦という女性の生き方に疑問をもつたからです。

専業主婦とは彼女たちを育ててくれた母親です。専業主婦としての女性の生き方を身近に見て育った女の子は、小さい頃は「お母さん大好き、お母さんみたいになりたい」であっても、一人の女性としてみるようになつたとき、「お母さんの素晴らしい」でも苦労もわかります。お母さんのおかげで、大学を出て、仕事にも就くことができました。だけど、私はお母さんのように自分を犠牲にしてまで夫と子どものために生きることはできません。まして仕事をしながら夫の世話をしたり子どもを育てるのはとても無理です」と思うようになつたわけです。

この世代は男女を問わず高学歴です。卒業して就職する時期は一九八〇年代、空前の好景気でした。女の時代ともいわれました。女性の職場は飛躍的に広がりました。彼女たちの母親とは異なり、仕事をするということが人生の重要な選択肢として用意されていました。

されていたわけです。

もつとも、女性の高学歴化は、既に彼女たちの前の世代である団塊の世代の女性たちから始まっています。しかし、団塊の女性が卒業する時期は、未だ社会の側に女性を受け入れる体制ができていませんでした。彼女たち自身も家事・育児の担い手＝女性という伝統的な価値観から脱却できずに、結局は専業主婦になりました。

ところが、昭和三十年代半ば以後に生まれた少子家庭の女性は、自分たちが結婚する年齢になつたときに、仕事の場は広がっていました。しかし、残念ながらパートナーとなる男性の多くは、専業主婦の母親に大事に育てられ、仕事一筋の父親をモデルに育つた長男です。一般論は別として自分の妻には専業主婦を望み、たとえ妻の兼業を認めて、自分は家事・育児を分担する気持ちも技術も持ち合わせていない男性が多數派でありました。企業のほうも、男女雇用機会均等法の後押しで総合職として採用したものの、伝統的な職場の花に見立てるこことはあつても、育児休暇を代表に家事・育児をしながら仕事をする女性の能力を生かすシステムやルールができるいると

はいいがたい状況でした。

その結果、仕事を続けたいと願う女性であれば、たとえ恋人がいたとしても、「子育てと仕事の両立なんて大変なことは私にはできません。それでもパートナーが協力してくれれば努力しようと思いますが、どうも期待できそうではありません」となり、「もう少し仕事を続けたいから、結婚も出産も先に延ばしましょう」といつているうちに、益々仕事が重要になつて、「結婚はあきらめましょう」という選択をせざるをえなくなる、というわけです。さらにたとえ結婚しても、「まだ仕事をしたいから、子どもをつくるのはもう少し先にね」という女性も少なからずいるはずです。これが八〇年代に職場進出した女性たちの選んだ道です。

ところで、もうおわかりと思いますが、「少年ジャンプ六〇〇万部」は、実は二回目の少子化が顕著になる昭和五十年代後半に小学校高学年になり、平成の時代に大学へと進学する団塊ジュニアの成長とともに生じた現象であったわけです。

そして、ジャンプが六〇〇万部への道を歩むのと同じ時期に、団塊ジュニアの先輩

である家庭内少子化第一世代の女性が社会に出て選んだ生き方が、結婚をしない（子どもを産まない）ということであつたわけです。

しかしそれにしても団塊ジュニアはなぜ他の少年雑誌ではなく『少年ジャンプ』を選んだのでしょうか。あるいは、少子化第一世代の女性はなぜ家事・育児よりも仕事を選んだのでしょうか。

この二つの疑問を解く共通の答えを探すところから、少子社会における子どもと大人の関係のあり方について考えてみたいと思います。

(6) 何が変わったか

まず『図一三』を見てください。これは人口千人当たりに子どもが何人生まれたかを示す図です。団塊の世代は約三十四人生まれたわけです。団塊ジュニアは約十九人です。それに対しても現在は九人台です。

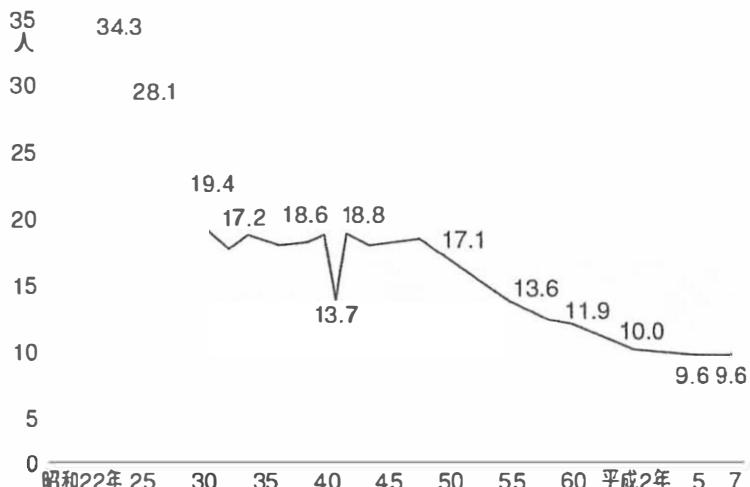
(6) 何が変わったか

どもの数は、団塊ジニアの頃とそれほど変わっていないことが明らかになっています。すなわち、現在の少子化は一人の女性が産む子どもの数の減少ではなく、子どもを産む女性の数が減ったことが原因です。したがって、人口千人当たりの出生率が半減したということは、子どものいる家庭が半減しているということでしょう。それは子どもから見れば、家の中には自分も含めて二人ですが、家の外には仲間がない、ということを意味するはずです。

要するに、家庭内少子化の時代は、団塊の世代と比較すれば、家庭の中の子どもが少なくなりましたが、子どもをもつ家庭は多かつたわけです。団塊ジニアの場合も、兄弟姉妹は少なくとも、同様に子どもをもつ家庭はかなりあり、近所には同じ年の仲間がいたわけです。ところが、現在は家庭の中に子どもが二人というのはあまり変化していないのですが、子どもをもつ家庭のほうが少なくなり、その必然として家庭の外に仲間がいなくなつたというわけです。

次に《図一4》の「大学・短期大学への進学率」を見てください。

《図一3》 出生率の（人口1,000対）の推移



[注] 昭和48年以降は沖縄県を含む。資料：厚生省「人口動態統計」

団塊の世代は家の中にも外にも、子どもがプロゴロいました。団塊ジニアの場合は、一つ一つの家族の子どもの数は少なくなりましたが、その親は団塊の世代ですので、子どものいる家庭はたくさんありました。親のようにさまざまな年代の子どもたちと遊ぶことはできませんが、同じ年の子どもは近所にそれなりにいました。

しかし、現在の子どもたちの場合はどうでしょうか。

さまざまな調査から、結婚した女性が実際に産む子どもの平均数は二人を切ったことなく、その意味で現在の家族の中の子

このグラフは西暦で書かれていますので西暦でいいますと、男性の進学率は、若干の上がり下がりはありますが、戦後一貫して上がり続け、一九七五年（昭和五十）から八〇年（昭和五十五）にかけて四〇パーセントから四五パーセントの間でピークに達します。その後はやや下降ぎみになり、三五パーセントから四〇パーセントの間で推移しています。

女性の場合は、一九八五年頃までは男性よりも約一〇パーセント低い割合で男性と同様のコースを描いて上がっていくのですが、その後は男性とは逆に下がることなく九年を境に男性よりも高くなり、現在は約四〇パーセントを超えるようです。短大を含んだ割合ではありますが、男性よりも女性のほうの進学率が高いわけです。

《図一5》の「高等学校進学率と長欠率（中学生）」は登校拒否の増加、最近は不登校という言い方に変わっていますが、それと高校進学率との関係を示しています。

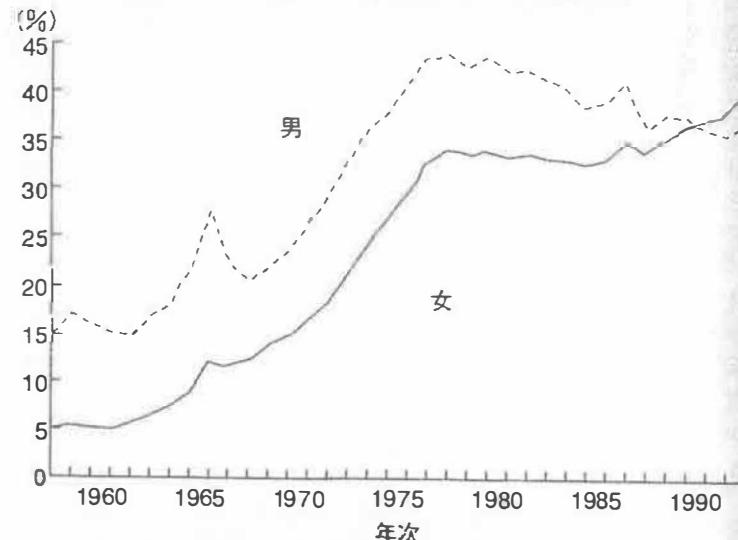
このグラフが示すように、昭和三十年代にも長欠児はかなりいたわけです。これは学校が嫌いでサボっている子どももいますが、親の無理解で学校へ行かせてもらえない

い子どもや農作業を代表に家の仕事が忙しくて学校に行くことができない子どもたちも含まれています。まだ子どもの労働力を必要とする時代でした。

教師をはじめ学校関係者はそういう子どもたちが学校に来れるように、一生懸命努力しました。その結果、昭和四十年代には長欠率は急速に下がっていました。ところが、昭和五十年（一九七五）代前半に再び長欠率が上がり始めました。これが登校拒否です。

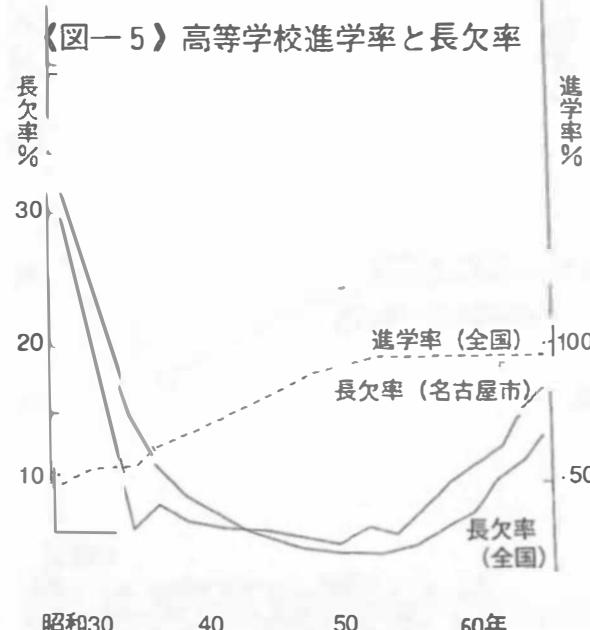
もう一つのグラフである高等学校進学率を見てください。昭和五十年頃に

《図一4》大学・短期大学への進学率



- 文部省統計調査課「文部省統計要覧」による。
- 大学・短期大学等への進学率：大学部・短期大学本科入学者数（浪人を含む）を3年前の中学校卒業者数で除した比率。

(7)みんな高校や大学へいけるようになったけれど



滝川一廣「登校拒否はなぜ増えるのか？」
『別冊宝島183「日本の教育」改造案』(宝島社より)

のみでなく高等学校へ進学することはそれほど珍しいことではなくななりました。それでも普通科よりも商業科や工業科といった職業高校に進学する人が主流でした。大学進学を目指す者はわずかで、中卒あるいは高卒で多くの者は職についていきました。早ければ十五歳、遅くとも十八歳で大多数は実社会に出たわけです。

さらに、戦前の日本ではもつと早く社会出ていきました。義務教育は現在の小学校にあたる尋常小学校あるいは国民学校のみです。その上の中学校（現在の中学校に対して旧制中学といわれますが）に入るため

このような変化の意味をもう少し具体的に考えてみます。

私は昭和二十四年生まれ、団塊の世代の最後になります。私の年代から、義務教育

ピークに達しています。ということは高等学校進学率がピークになつたときと登校拒否が増え始めたときはともに昭和五十年代前半ということになります。そしてこの時期に《図一四》で見たように、日本の大学の進学率は約四〇パーセント前後でピークに達するわけです。

一生懸命努力して、ほとんどすべての子どもが高校教育を受けることが可能になり、その四割前後が大学に進学できるようになつたときに、今度は子どもが学校に行かなくなつてしまつた、というわけです。

ここに日本の教育の悲劇があります。

(7)みんな高校や大学へいけるようになったけれど

(7)みんな高校や大学へいけるようになつたけれど

いいかえれば、短大や二年制の専修・専門学校であれば二十歳、四年制なら二十二歳、浪人すればその分を足した年になつて初めて社会に出ることになるわけです。

そして、この高校と大学の進学率がピークになる昭和四十年代後半から五十年代にかけて、高校・大学へと進学してきたのが昭和三十年代に生まれた世代です。すなわち、少子化第一世代とは、高校進学は当然のこと、できることなら大学進学もと、親の教育熱とりわけ専業主婦の母親に叱咤激励され、勉強中心に育ってきた第一世代でもあるわけです。

すなわち、家庭内少子化のスローガンである「少なく産んで良く育てる」ということとは、具体的には、親にとつては「良い学校へ入れるのが一番良いことだ」と信じて子どもを育てることであり、子どもにとつては「学校の成績が良いことが人間にとつて良いことだ」と信じて育てられることではなかつたでしょうか。

そして、その学校において、子どもたちは「男と女は平等である」という理念のもとで教育されました。事実、学校の成績に関する限り男女差別はなく、むしろ女性の

には試験を受けなければなりませんでした。そして、中学に進学する子どもは少数派、ほとんどの子どもは義務ではないが尋常小学校の上に付設された二年制の高等科を出るか出ないかで職につきました。いいかえれば十三歳や十四歳で社会に出たわけです。

ところで、私は東京オリンピックの年は中学三年でした。昭和三十九年（一九六四）です。したがつて、団塊の世代は昭和四十年（一九六五）を前後して大量に社会に出ていったわけです。高度経済成長真っ盛りの時代でした。この経済成長のピークが昭和四十五年（一九七〇）に大阪で開催された万博でしたが、その後の昭和四十八年（一九七三）のオイルショックで終わりをとげます。そしてその頃までに、中学から就職クラスが消えて卒業生の大多数が高校に進学する時代に変わりました。《図-5》で見たように、引き続いて五十年代には大学進学率もピークに達するわけです。さらに現在では、大学進学率は四割とそれほど変わらないのですが、専修・専門学校への進学者を含めますと、高校卒業後も何らかの学校に進学する率は七割前後にまで高まっています。大多数が二十歳過ぎまで学校という世界にいるということです。

ほうが男性よりも高くなる場合もかなりあつたはずです。そして、この学校という世界の基準をもとに、優秀とされた少子化第一世代の女性が、実社会に出て働き始めたのが昭和五十年代後半、すなわち一九八〇年代です。この女性が結婚をためらつたときに近年の第二次少子化が生じたわけです。他方、この高校と大学進学率がピークに達する昭和四十年代後半から五十年代前半に生まれて、二十歳過ぎてもなお多くの者が学校という世界に所属するようになる一九八〇年代（昭和五十年代後半から六十年代）に学校という世界に入つていった大量の子どもたちが団塊ジュニアです。そして彼らが思春期を迎えたときに手にしたのが『少年ジャンプ』であつたわけです。どうやら、「ジャンプ六〇〇万部」と「結婚しない女性と結婚できない男性」という二つの現象を結ぶ鍵は、学校という世界にあるようです。

(8)何が失われたか

今では当たり前のように見えますが、大多数の人たちが二十歳過ぎまで学校にいるというように日本の社会が変化してからせいぜい十数年です。少なくとも、団塊の世代の多数派は義務教育十実業高校、大学卒は少数派でした。ということは、団塊の世代までの日本の社会には、二十歳前後まで学校という世界にいる男女を一人前の人間に、あるいは男性と女性として自立させるノウハウは蓄積されていなかつたということです。

いいかえれば、それは親として、自分の経験をわが子の子育てに直接応用することが困難になるということでもあるわけです。

では、学校とはどういう特性をもつた世界なのでしょうか。

『図一六』は、私たちの世界を「公的」と「私的」、「日常的」と「非日常的」という二つの軸で表現したものです。「日常的」とは毎日繰り返すことというほどの意味です。その中で「公的な世界」が「I」、「私的な世界」が「IV」です。「非日常的」はたまに行うことという意味です。同じように、その「公的な世界」が「II」、「私的な

(8)何が失われたか

「IV」の世界がほとんどで「I」の世界が何かわからなくなる方はおられないでしょうか。「II」を何にするか迷わないでしょうか。たとえば、子育てセミナーに参加する場合、自分の子育てを反省してよりよい親になるために参加するなら「II」、講師の名前にひかれたり、友だちとのつきあいなど、遊びの要素が強ければ「III」ということです。では「I」は何でしょうか。私見ですが、性別役割分業という社会システムを前提とした専業主婦の場合、「I」の世界は

でしょう。もちろん、これは一般的な傾向で「I」がパチンコの方もおられるし、業務命令で休まなければならないとすれば「II」になるかもしれません。また、一人の人間としての自立という観点からこの図を見ますと、「I」の世界で一人前になることが「経済の自立」、「IV」の世界で一人前になることが「生活の自立」といえるでしょう。

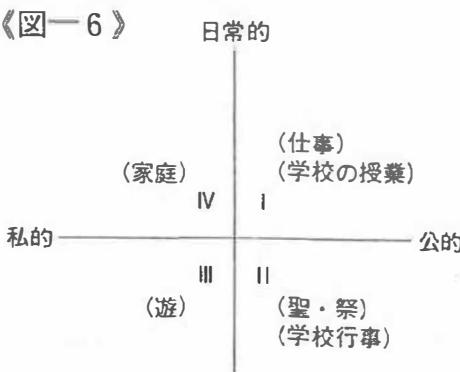
このような例をヒントに、ご自分の生活がこの図の中にどのように位置づけられるか考えてみてください。

「I」と「IV」が毎日繰り返される世界だとすると、「II」は「I」と「IV」が正しく繰り返されているかを確認したり修正したりするための世界です。それに対して、「III」は逆に「I」と「IV」でたまたまストレスを解消したり、発想を転換して新しい世界を創造するための世界です。

たとえば一般のサラリーマンでしたら、「日常的」で「公的」な「I」は「仕事」です。「私的」な「IV」は「家庭生活」ということです。また、年に何回か行われる会社の特別な「儀式」や「査定」が、「公的」で「非日常的」な「II」の世界の代表です。

たまに会社の帰りに寄る駅前のパチンコ店での「遊び」が「非日常的」で「私的」な「III」の世界の代表というわけです。今はやりのリフレッシュ休暇も「III」になる

世界」が「III」です。



ほとんどないといわざるをえません。

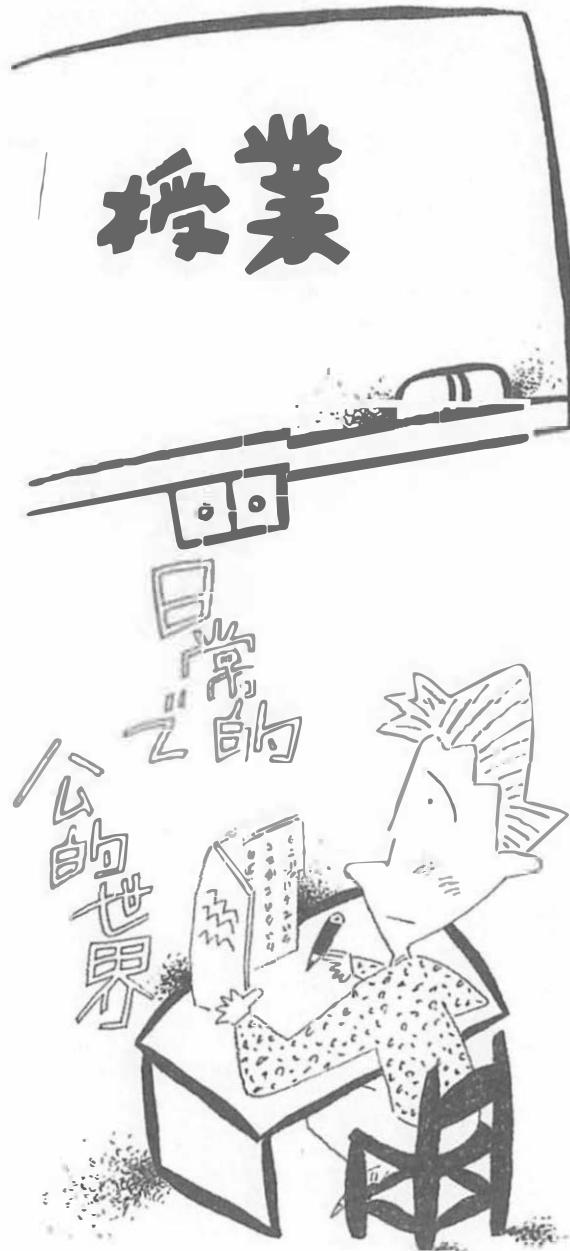
そこでこの図から性別役割分業の特性を考えてみると、「日常的」で「公的」な世界である「I」の役割や文化を「男性」の側に、「日常的」で「私的」な世界である「IV」の役割や文化を「女性」の側に固定的に割り振る社会的な慣習あるいは社会制度ということになります。その意味では、性別役割分業の世界というのは、「男」に「経済の自立」を割り振り、「女」に「生活の自立」を割り振り、男女が合わさつて初めて人間として生きる世界の全体となる社会の仕組みといえます。いいかえれば、男女いずれか一方だけでは自立できない世界となります。

ただし、もし女性が仕事をするようになればどうでしょうか。当然、「I」も「II」も「III」も男性と同じように必要になるはずです。そして、「IV」はもともと女性の側に割り振られた文化ですから持っています。女性のみで「I」から「IV」まですべてそろうわけです。逆に、男性の場合、もし、洗濯や料理のみでなく、布団の上げ下げから着替えまですべて奥さんの手を煩わせているとすれば、「経済の自立」はでき

ても「生活の自立」は全くできていないことになるわけです。

では、子どもの場合はどうでしょうか。いうまでもなく、学校に通っている子であれば、「学校の授業」が「日常的」で「公的」な世界です。また、「家庭生活」が「日

(8)何が失われたか



「常的」で「私的」な世界ということになります。「非日常的」な世界では、「遊び」が「私的」な世界の、「学校の儀式」が「公的」な世界の代表でしょう。もちろん、「I」が遊びになる子どももいると思います。成長の度合いによつても異なるはずです。ただし、「遊び」が「III」であるためには、「私的」である以上、親の目からも、教師の目からも離れた子どもたち自身の世界であることが重要な条件であることを強調しておきたいと思います。

ところで、学校は「I」と「II」の世界が中心です。休み時間に遊びがあつても、それは「I」のための休息であつて、重要なのは「I」です。「III」と「IV」にかかることは学校の外の世界の問題と位置づけられているはずです。したがつて、子どもたちの世界において学校の重みが増すということは「I」と「II」が増えて「III」と「IV」が減少するということです。

このように考えますと、学校は子どもが大人になつて一人前の人間として自立する上で必要な「I」の世界、すなわち「経済の自立」の世界の準備はできても、「IV」

の「生活の自立」はできないことになります。しかし、もし家庭での生活が学校の予習・復習あるいは塾での勉強が子どもの学校の外の時間と空間を占めるようになるとすれば、子どもは実質的に「III」と「IV」の世界を失うことになりはしないでしょか。いつたいどこで子どもは「生活の自立」のための力を身につけるのでしょうか。さらに問題はあります。一応は、学校によつて「I」と「II」の世界で生きるための力を身につけることができれば、「経済の自立」はなんとかできます。しかし、同じ「I」の世界であつても、子どもが学ぶ学校の世界と大人が働く仕事の世界では性格がかなり異なるのではないでしょか。

学校は教師が教室で教科書を時間割にしたがつて教える世界です。時間も場所も内容もすべて前もつて決まつていい世界です。全員が同じようになることが良いとされる世界です。正しい答えは必ず存在し、それも一つである、という世界です。

この学校の世界と比較的似ているのは規格化された工業製品を流れ作業で生産する工場労働です。学校は農業中心の社会を工業中心の社会に変えるためには非常に合理

的な教育制度というわけです。

しかし、現代の工場での生産はロボット中心の世界に変化しているはずです。その傾向は益々強まるはずです。人間の職場は生産ではなく人と人がフレキシブルに交わる世界が中心であるはずです。その代表が生産された物を売買することにかかる営業活動です。これは人間しかできません。

ただしそれは相手のある世界、自分ではなくお客様の都合が優先される世界、時間も場所も流動的、値段は交渉によつて変化する、理不尽な横やりで積み重ねてきた交渉が壊れてしまうこともある、唯一正しい答えなど存在しない、答えは自分でつくらなければならぬ、というわけです。教科書とは正反対の世界です。

このような世界に貫かれているのは、多様な要素が相互に影響し合つて刻々と変化する確率論的な世界です。ベストではなくベターを求める世界です。だれもが共通してもつている教科書の答えではなく、その人にしかない個人的な魅力が優先される世界です。

(9)自立のために必要な力は



要するに、現在の学校での勉強は、それを教わった子どもたちが大人になって「経済的自立」のために仕事をするときに、あるいは「生活の自立」をする上でも、いずれの場合にも必要になる知識や技能や態度を身につける上でどれほど役に立つかは、非常に疑問……ということです。

(9)自立のために必要な力は

少し難しくなりました。具体的に考えてみましょう。

学校へ通っているお子さんがいる方は

ろで応用されていることは否定しません。でもそれを知らなくても家庭生活でも仕事の上でも困ることはほとんどないはずです。

唯一困るのは中学生になつた子どもに聞かれたときではありませんか。

もちろん、九九を代表に学校での勉強が私たちの現在を支えていることは否定できません。このように私が自分の考えを表現し、それを聞いて（読んで）理解してくれることも学校において学んだ文字が基礎になっています。

さらに、単に言葉や計算のための知識だけではありません。講演会に参加したときのことを思い浮かべてください。たとえ話がへたで面白くなくても、一時間以上も講師の話を黙つて聞くという学習者としての態度、あるいは時間どおりに集まるという習慣、これらは学校という世界に長期間学んだことによつて培われた態度や習慣であるはずです。そして、このような態度や習慣が、現在の工業化された豊かな日本を築く上で非常に重要な役割を果たしたわけです。その意味で、日本の学校は、世界で最も優れた教育システムであり、最もレベルの高い教師集団によつて担われていること

科書を見てください。そして、そこにある問題を解いてみてください。多分、小学校四年生以上の子どもの教科書であればつまづくところが出てくるはずです。それでも小学校の場合は何とかこなせても、中学校の教科書の場合には、ほとんどの方が自分で解ける問題を探すのが困難でしょう。

その理由は、小学校四年生あたりから学習する内容が、生活に直接関係する具体的なモノの世界から抽象的な論理の世界に変化してくるからです。その代表が分数です。 $\frac{1}{2} + \frac{1}{2}$ の答えはすぐわかつても、 $\frac{1}{2} + \frac{1}{3}$ の答えにはとまどう方もおられるのではないでしようか。分数を約分するということは日常生活ではほとんど存在しないからです。分数計算の多くは抽象的な思考の世界の問題だからです。

同様に、中学校以上の内容は、少なくとも私たちが生活や仕事をする上で日常的に必要な知識がどれだけあるでしょうか。微分積分どころか因数分解さえも、大人になつて日常的に使用する人がどれだけいるでしょうか。もちろん、今はカード型計算機から大はさまざまなコンピューターを内蔵した機器にいたるまで、気がつかないとこ

は強調しておきたいと思います。

しかし、それだけにマイナス面もあるわけです。特に、中学校以上の知識の内容について問題が大きいと思います。私のような研究者、あるいは行政官僚、医者、弁護士など、法律や科学的知識を操作する職業では、現在の学校で教える知識はある程度有効です。職業で生かすことができます。

しかし、自分の才能や肉体を生かした仕事、あるいは先に述べましたように営業活動に代表される仕事にはあまり役立たないはずです。何よりも、母親や父親として子どもを育て家事を行う上で中学校以上の学校で



の学習がどれほど役立っているでしょうか。もし、役立つていれば教科書を見てとまどうことはないはずです。

ところで、余談ですが、私は子育てというのは「子どもを自分からいかに離すか」ということだと考えています。いいかえれば、子どもが成長するということは「親から離れていく」ということです。そのため、私はこのことを強調するレトリックとして、「子育てとは子捨てなり」と表現します。子どもを何のために育てるかといえば、子どもを捨てるためです、というわけです。このように表現しますと違和感をもつ方もおられると思いますが、大事なのは、自分がいなくなつたときに子どもが一人で生きていけるための力をいかにつけるか、ということが子育ての目的である、ということです。子どもは親の生き甲斐のためでも家の跡取りでもなく、老後の保護者でもないということです。

それでは、子どもを捨てる準備、子どもから離れようとする準備はいつ頃から始まるのか。それを見分ける最も簡単な方法が、子どもの教科書を見て、わからないところ

(9)自立のために必要な力は

(9)自立のために必要な力は

ろが出てきたとき、というわけです。先に述べましたように、小学校三・四年くらいになると、教科書を見て一瞬とまどうところが出てくると思います。小学校を卒業して以来、ほとんど使っていない知識が出てくるからです。

もう一つ理由があります。小学校三年から四年にかけては子どもが子どもではなくなるための準備に入るときだからです。教科書の内容が抽象的になることも、抽象的思考が可能になるという意味でその現れの一つです。もう一つ別の現れがあります。

男の子が男に、女の子が女に変わるための準備です。もちろん、一般的には思春期はもう少しあとですが、子どもたちの身体と心の内面では確実に変化が生じています。ですから、親のほうもその頃から、「この子は自分の子どもではなくなるんだ」と覚悟をして、子離れの準備をする必要があります。「可愛い〇〇ちゃん」ではなく自立した男性の「〇〇」、女性の「〇〇」として、自分たちの家庭からわが子を「巣立」たせることが子育ての目的になるわけです。だから「子育ては子捨て」ということになるわけです。

そして、自立とは平たくいえば自分のことは自分でできるということです。自立した一人前の男と女ということは、まず実社会に出て経済的に自分の稼ぎで生活できるということです。「経済の自立」が必要条件の第一です。さらに、お金があつても実際に日常的に食べるものを作らなければなりません。着るもの洗濯しなければなりません。部屋の掃除も必要です。いくら外食産業をはじめサービス業が盛んでも、これらすべてをお金で^{まかな}賄おうとすれば安月給ではすぐ破産します。加えて高カロリーのファーストフードばかりでは栄養過多（？）になってしまふでしょう。「生活の自立」がもう一つの必要条件です。

すなわち、男女の性にかかわりなく、「経済」と「生活」の双方とも「自立」することが、これから社会を一人の人間として生きてゆくための必要条件です。

では、男と女として自立するための十分条件とは、なんでしょうか。人生のパートナーを見いだし、新たな家庭をつくり、子どもを育てることができる意欲と技能、これが私の考えです。もちろん、結婚しない生き方や女性のみで子どもを生み育てると

(10)男女の自立への道は

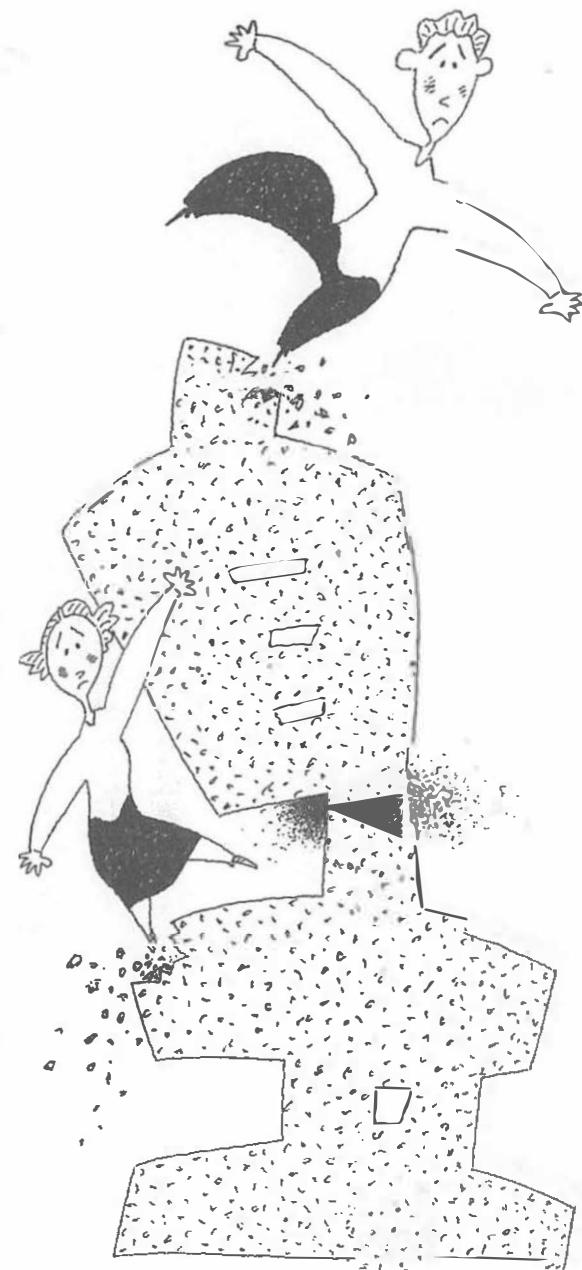
す。その意味で、だれの子どもであれ、だれと共に生きるにせよ、新たな命を男女が共に生み育てることが、一人の男性と女性として自立するための十分条件だと考えます。

しかし、残念ながら、「経済」「生活」いずれの自立にも、また、「人生のパートナー」を見いだす意欲と技能の育成においても、学校という世界が適していないことは、これまで述べたことで理解できると思います。

いいかえれば、学校の世界が広がれば広がるほど、子どもは一人の男もしくは女として自立するための世界を失う危険性があるということです。

(10)男女の自立への道は

繰り返しますが、学校で教えてくれるのは、大人になつて現実に経験する世界の内容ではありません。もともと学校は子育ての技術を教えるために制度化されたわけで



はありません。先ほどの図式でいえば、子育ての技術は「IV」の世界に必要な知識や技術です。それは学校ではなく家族と生活する過程で経験的に獲得するものでした。

たとえば、いわゆる貧乏人の子だくさんの時代は、自分の兄弟姉妹や近所の子どもとかかわる（遊ぶ）ことから獲得できました。就職した奉公先の子どもを実際に育てることから、子育てを経験することもできました。

それに対して、豊かな少子家庭では、家族の中の子どもは自分以外では年の変わらない兄弟姉妹が一人いるかどうか、あとはみんな自分を育ててくれる大人です。家外には仲間がない。学校には仲間がいるものの親しくつきあうのは同年代の子どもか教師、その人間関係は非常に限られます。

少子社会に育つ子どもは、成長とともに生物としては子どもを産む体に変化するけれども、その子どもをどのようにして生み育てるかという技術や心を学び取るための経験を積む機会がほとんどないままに大人になってしまいます。生まれて初めて抱く赤ちゃんが自分たちの子ども、という若いお父さんやお母さんばかりになる、と

いうことです。

ところで、団塊の世代は子育ての経験を持つ最後の世代でしょう。しかし、その子どもである団塊ジュニアに対しても、学校という世界を優先させてきたはずです。理論的には先の図式の「IV」の世界、すなわち学校を離れた日常生活があるはずですが、現実には、多くの家庭では、子どもが学校に入学するということは、「IV」の生活の場合に「I」の学校の文化が入ってくるということではなかつたでしょうか。

普段の生活をふりかえってみてください。子どもが学校から帰つてくると、なんというでしょうか。「おかえり、宿題は?」「塾は?」「ピアノは?」、と問いただす(?)習慣がないでしようか。もしあるとすれば、学校という世界がもつていてるルールを、家でも繰り返していることになります。

もう一つ例をあげましょ。お子さんが小学校に入るときに机を買ったと思ひます。私の家庭でもそうです。ただし私自身は入学したときに買つてくれたのはランドセルでした。このランドセルと机の違いが大きいのです。

つて、家庭と学校は同じ世界になってしましました。物理的空间的には移動したとしても、学校のルールが机にくつづいているからです。

さらに、子どもが学校でも家庭でもないところに行こうとしても、塾やお稽古事の世界が待っていないでしょうか。いずれも学校と同じ世界です。大人が教える世界であり、子ども同士が互いに学んだり遊んだりする世界ではないからです。サッカーラブや少年野球も同じです。遊びではありません。大人が作ったルールにしたがって、大人が訓練し競争させる場である限り、学校と同じと考えます。

子どもにとって遊びの世界とは、大人の目が届かない世界です。学校でも家庭でもないところで、子どもたちが互いに共に生きていくためのルールを身につける場が遊びです。あるいは、家庭や地域社会での日常生活は、大人になったときにどのように生きていくかということを学ぶところです。

子どもの世界が学校中心になり、それ以外の世界が学校の影響下に入ってしまうということは、このような学びの機会が失われることです。



学校は勉強をするところ、ランドセルは勉強道具を学校へ持っていく入れ物です。机は違います。学校ですればよいはずの勉強を、家でもさせるための道具です。

ランドセルのみの時代の子どもは、ランドセルを降ろすことで、「IV」の「家庭生活」や「III」の「遊び」の世界に戻ることができました。そしてその中で、学校では教えてくれない、あるいは学校では禁止されているが大人になつてから役に立つ知識や技能を身につけることができたはずです。それが家庭に机が入つて来ることによつて、それも学校の机よりももつと立派な机によつて、

それでも、小学校低学年から中学年くらいまでは、学校の勉強もそれほど厳しいわけではありません。大人の目があるとはいっても、子どもたち自身の世界もそれなりに保障されています。

問題は思春期です。思春期とは、それまで自分をつくってきた周りのものを一度否定して、改めて問い合わせることから、自分なりの生き方を見いだすために悩むときです。自立への苦しみです。そのときに、自分が男あるいは女であるということが非常に重要になるわけです。

中学生の頃を思い出してみてください。自分なりの生き方を求めるとき、その中身は男あるいは女としてということが重要であつたはずです。

しかし、学校という世界は、人間の文化はあつても男と女の文化はありません。たとえあつたとしても、表には出せません。人間を育てるところであつて、男と女を育てるところではないからです。基本的には、学校は男女平等が建前です。ただし、それはあえていえば、男性と女性という性差を前提とした平等というよりも、「女性も

男性と同様に扱うべきである」という意味ではないでしょうか。いいかえれば、学校は男女平等であることによつてすべてに男性の世界のルールが平等に適用されるといえないでしようか。

もちろんこの場合の男性とは生物としての男ではなく、少し固い表現ですが権利の主体としての男です。人間としての権利、いわゆる人権として男女は平等という次元から、女性は男性と同じように扱うべきである、というのが学校的世界の男女平等の意味です。

このこと自体は非常に重要なことで、学校の世界が他のどの社会よりも優れた面です。しかし、それは同時に、生物としての性差を積極的に取り入れて、男の子が男になり女の子が女になっていくときに何が必要かということを教えることを、学校は非常に不得手であるということでもあります。だから性教育が苦手なのです。

少なくとも、現実に人生のパートナーを見いだし、子どもを生み育てるための意欲と技術の教育という意味では、学校が行う性教育はほとんど役に立たないはずです。

務教育を終えるかどうかの思春期真っ盛りに、実社会に出た十三、四歳の少年（？）は、悪い先輩に手ほどきを受けたと思います。奉公先の奥さんとその子どもから、経験的に学び取った十三、四歳の少女（？）も多かつたと思います。先の図式でいえば「III」と「IV」の世界です。

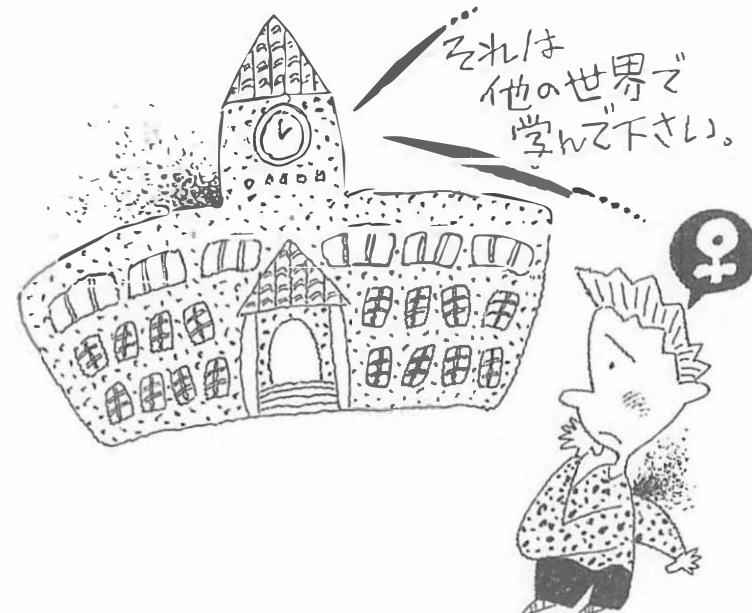
あるいは、先に述べましたように、団塊の世代までは、自分の成長する過程でなんらかの経験的な学びの機会があつたはずです。学校という「I」の世界とは異なるルールで進行する「II」と「III」と「IV」の世界が子どもの世界にあつたわけです。しかし、団塊の世代以後に進行する急激な少子家庭化と高学歴化は、子どもの「I」のみでなく、他の三つすべての世界に学校のルールが浸透する過程でもあつたといえるでしょう。

ただし、子どもたちも負けてはいませんでした。大人と学校のルールをかいぐつて、自分たちの世界を見いだしたわけです。

それが『少年ジャンプ』に代表されるマンガの世界であつたわけです。

性交、受精、受胎などの科学的用語を教えることはできても、恋人をみつける手練手管や化粧技術、あるいはセックストークの方法や子育ての技術などを具体的かつ実践的に学校は教えることは絶対できないはずです。でも、パートナーを見いだし、子どもを生み育てる上でどちらの知識や技能が重要でしょうか。

それは学校ではなく、他の世界で学び取る知識・技能・態度であるはず、と学校の関係者はいうと思います。そのとおりです。実際に、かつての社会、それは繰り返しますが貧乏人の子だくさんの時代ですが、義



(II) ジャンプワールドの秘密

『少年ジャンプ』を代表に、少年マンガ雑誌の世界とは、男の子が男と女のルールを学ぶ世界なのです。男の子が男になるときに何が必要なのかを教えてくれる教科書がマンガ雑誌なのです。さらに、男女の性差を超えて、一人の人間として子どもが大人になるときに何が必要なのかを教えてくれる教科書です。

もちろん、子どもがこのような目的をもつて、教科書としてマンガ雑誌を買って読んでいるという意味ではありません。しかし、最初に紹介したジャンプ六〇〇万部発行という事実の意味と、これまで述べてきた少子社会に育つ子どもの現実とを重ね合わせて考えたときに、私はこのように判断したわけです。

この詳しい説明は、私の『なぜ子どもは「少年ジャンプ」が好きなのか』を読んでいただきたいのですが、要するに、地域社会がなくなり、子どもに日常生活の隅々まで

で学校が入り込んでしまった社会で、子どもが男と女として自立するための意欲や知識や技能を学び取る世界として見いだしたのが『少年ジャンプ』である、というのが私の考えるジャンプ六〇〇万部の基盤なのです。

(II) ジャンプワールドの秘密



ところで、ジャンプを子どもが選んだのはわかるが、ジャンプもまた大人が作っていることに変わりがないのではないか、と思われる方も多いと思います。そのとおりです。ただし、その作り方において、大人ではなく子どもの都合を優先する工夫がさまざまあるわけです。安価でコンパクトなマンガ雑誌メディアの特性をフルに生かしたことです。

団塊ジュニアが読み始めた頃は百五十円、今は二百円前後、いざれにせよ小遣いをまとめてもらえる小学生でも一週間に一冊程度なら買うことができる値段です。また、たとえ親が読むのを禁止しても、通学途中や勉強部屋での宿題の合間というわずかな時間と場所さえあれば、隠れて読むことができます。おまけに、親の団塊の世代はマンガ第一世代、正面きつて叱^{しか}ることはできないはずです。もつとも、親のほうは（私のことでもあります）、「ジャンプではなくマガジンですが……」。

内容面でも工夫されています。ジャンプワールドの特性である『少年ジャンプ』のコンセプトは「友情・努力・勝利」です。この三つの言葉は、考えてみればいずれも

学校教育が大事にしている価値です。しかし、学校の中では、この言葉どおり実践することはできないはずです。たとえば、「友情」の重要性を否定する学校はないと思いますが、試験のときに問題の解けない友だちに教えてあげたら、どうなるでしょうか。本当に困っているときに助けてあげるのが、友情ではないでしょうか。あるいは、「努力」したからって、すべての子どもが満点になるわけではないことを子どもたちはちゃんと知っています。何よりも試験は皆が「勝利」するためではなく、順番をつけるためであることも知っています。

問題は三つの価値がどのような社会的文脈のもとで具体的に展開されるかです。

また、「少年ジャンプ」に限らず、マンガに対する親とりわけお母さん方の非難あるいは心配の種はエロチックな描写や暴力的な表現だと思います。確かに、エッチなマンガがあります。しかしそく読んでみてください。すべて純愛です。表現としてはエロチックでも、行為は眞面目です。どちらかといえば古典的な純愛物語がほとんどです。暴力についても表現は過激ですが、それは背景のようなものです。ストーリー

(12)女性が産まない理由



きたわけです。その詳細については、もうここで語る余裕がありませんので、興味のある方は申しわけありませんが私の本を読んでみてください。

最後に結婚しない女性の問題について述べておきます。

(12)女性が産まない理由

先に述べましたように、団塊ジュニアの先輩である少子化第一世代の女性が就職するようになつたのが一九八〇年代です。もう一つ上の世代である団塊の世代の女性た

や主人公が発する言葉は、極めて真面目です。読んでいてむずがゆくなるくらい大まじめに「友情・努力・勝利」の価値を真っ正面から語り行動しています。嘘と思つたら読んでみてください。

このように、表現される内容の差だけではなく、その伝え方においてもジャンプロードは学校とは異なる特性をもっています。

学校が教える知識は概念としての知識です。学校は知識を具体的な経験を通じて子どもたちに身につけさせることはできません。要するにやってみることはできないわけです。もちろん、マンガも紙に書かれた世界である以上、実際に経験できるわけではありません。しかし、マンガの世界は口語（話し言葉）の世界です。吹き出しの中の言葉はすべて口語です。話し言葉は具体的な日常の世界につながっていきます。マンガは絵と話し言葉によって、読者の日常生活と直接交流することが可能なわけです。

とりわけ『少年ジャンプ』はその編集方針として読者カードを重視します。また新人作家を用いることにより、読者である子どもたちの世界を描くことに挑戦し続けて

ちは、仕事をしようと思つても仕事がなかつたし、古い母親の体質を受け継いでいました。しかし八〇年代は女性の労働市場が開かれました。

少子化第一世代の女性すなわち昭和三十年代半ばに生まれた女性の多くは、専業主婦の母親とサラリーマンの父親のもとで育ちました。ただし、未だ旧来の習慣が根強く、家庭では男の子が中心で、女の子は二次的な存在であったはずです。「女のくせに」とか「女らしくしなさい」という言葉が飛び交った時代です。要するに、母親から女の子は家事をしなければならないといわれて育つた世代です。

しかし、その一方で、高学歴社会に入っています。学校では男女平等で育ち、女性も大学へいくことが当然とされるようになつた最初の世代です。成績でも男性に負けることのない世代です。そして卒業したら一九八〇年代の好景気にぶつかります。社会的にも「女の時代」といわれ積極的に進出することが称賛されました。経済のソフト化といわれ、カタカナ業界を代表にサービス関連業種が多様になり、仕事も面白くなりました。

ところが、結婚を考えようとして相手の男性をよくみれば、専業主婦に大事に育てられた長男ばかり。女性のほうは、そんな母親に反発しながら自分なりに勉強をし、仕事をしてきた自立志向です。合うわけがありません。

職場自体にも問題がありました。結婚をして子どもを産んで仕事を続けていくには、パートナーが子育てや家事に対等にかかわってくれなければやつていけません。しかし、どうもマザコンの長男にはそれを望めそうにない。加えて、女性に門戸は開いたものの、職場は未だ男を中心。専業主婦の女性が背後にいて可能になる仕事の仕方が標準、まして女性が仕事と家事を両立することを奨励する仕組みも保障もありません。

現在のように育児休暇制度が法制化されても、昇給や周りの目が気になつて取るに取れない状況があるわけです。一九八〇年代は制度もないわけです。もし結婚すればすべてが女性の負担になるわけです。おまけに仕事のほうが面白いとなれば、あえていま結婚することはないわ、となつても不思議ではないわけです。

ただでさえ少子化第一世代ですので、人口規模が小さいわけです。それが子どもを

(12) 女性が産まない理由

(12) 女性が産まない理由

味で、今年から年に急激に出生率が上がるようであればよいのですが、そうでなければ、根本的に考え直さなければなりません。上の世代を見ていて、団塊ジュニアも結婚しないとなつたら、大変なことになります。もし団塊ジュニアが子どもを産まなくなつたら、日本の人口ピラミッドは完全に逆三角形になつてしまふからです。

そうなると、子どもの人口が半分になり、学校が半分になり、塾がつぶれます。このままで、昨年生まれた子どもが大学を受験するときは、七割以上が入れます。一昨年のデータですが、リクルートの予測では二〇〇九年には大学全入時代になるそうです。深刻なのは高校です。今でもほぼ一〇〇パーセントの進学率ですから、高校が余つてしまします。今後、どこを減らすかが大きな問題になるはずです。数年前から文部省が偏差値廃止を唱えているのは、こういう前提があるからです。

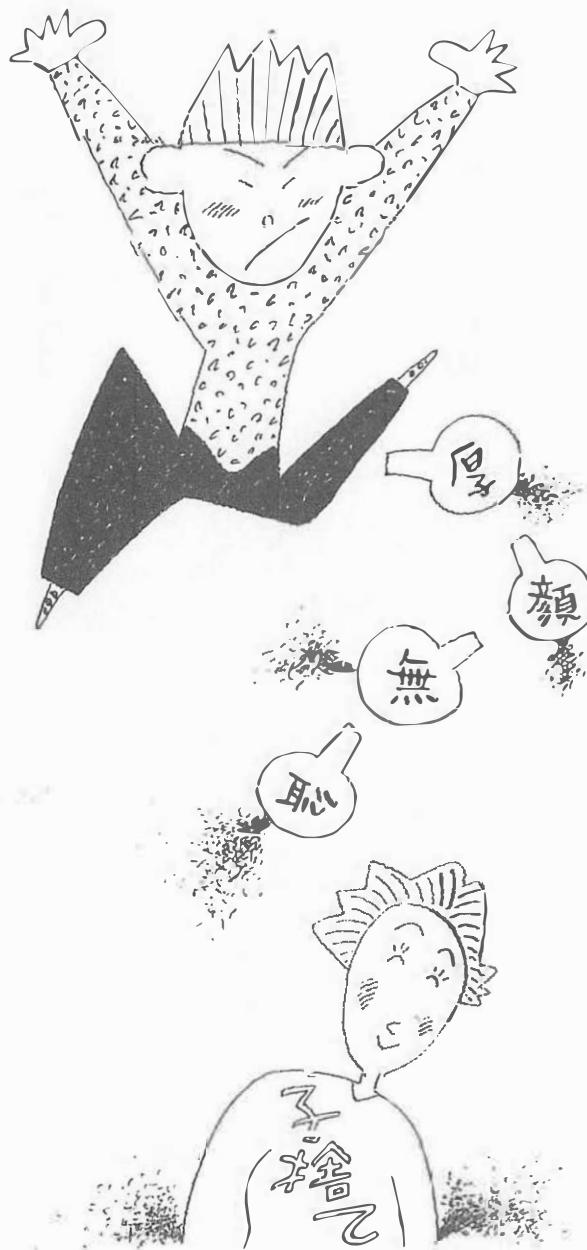
学校は一人ひとりの子どもを丁寧に育てていかなければならなくなります。先生は選ぶ側から、選ばれる側になります。東大は残るでしょうし、大企業に入るためには、良い大学にいかなければならぬというのを変わらないでしようが、現在のような学

産まないわけですから、当然少子化が進行するわけです。

ところで、人口学者は九〇年代半ばから、ということはもうその時期に入っているのです。出生率が上がるだろうと予測していました。その理由は、結婚を延ばしてきた女性が結婚し始めるだろうということ、団塊ジュニアが婚姻年齢に達するからです。実際に、先に述べましたように、団塊ジュニアの参入によつて、昨年生まれた子どもの数は前年より増えました。ただし、増えたといつてもわずか二万人、合計特殊出生率のほうは上がりませんでした。その意



(12)女性が産まない理由



でも、何があつてもメげずに生きていける、あえていえば厚顔無恥な子どもです。でも、こういう子どもは学校では一番だめな子どもとして扱われがちです。こういう子どもを育てるには、親が手を離さなければなりません。だから、子育ては子捨てなん

歴社会は崩壊するでしょう。なぜなら、良い大学に入つて、良い企業に入つても、楽はできませんから。もうすでに企業内では、ポスト不足で、学歴があつても出世できません。ヨコの労働移動も始まっていますから、終身雇用も壊れつつあります。

また、学校の知識が役に立つ職業というのは、先に述べましたように、弁護士にしても医師にしても、決まった知識を操作する職業です。しかし、これからは、決まった知識は崩壊し、クリエイティブな能力が問われます。

あるいは、大人になつて必要なのは仕事と生活の両方の能力です。女性は両方培つてきましたが、男性は片方しかできないことも述べました。女性は男性がいなくとも生きていけるけれど、男性は女性がいなければ生きていけないわけです。だから、男性は女性に見限られたわけです。

男性の自立、これが今後最大の課題です。男は、学校の勉強さえできれば生きていけるという幻想の中で生きています。しかし、学校の外の社会はそんな甘いものではなく、クリエイティブな能力が必要になります。一番強いのは、どんなところへ行つ

です。繰り返しますが、これから最も必要になる能力は人間交渉能力でしょう。それと、男と女の関係能力です。いずれの能力もこれまでの学校教育が苦手としてきた世界です。学校に代わってマンガの世界が培つてきた能力です。

これが、一番最初にマンガを読まずに勉強のみしている子どものほうが心配だといった理由です。

もちろんマンガも所詮はメディア。子どもたち自身がつくる世界ではありません。マンガという閉じた世界ではなく、子どもたちが少々の危険というコストを払つても、大人の目が届かない場、互いに学び合い教える世界をいかに用意できるか。それが少年ジャンプ六〇〇万部を通じて、あるいは一〇〇〇万部以上のマンガ雑誌全体を通して、子どもたちが私たち大人に要求していることだと考えます。

もしこのメッセージの意味を読み間違うと、少子化が益々進行し、日本の豊かさは根元から折れてしまうことを強調して第一部を終わります。

II 新しい親子の世界

(1) 子ども同士の豊かな関係を

この記事と関連して、半年後の平成九年（一九九七）一月一日の日本経済新聞朝刊に次のような見出しができました。

「出生数また減、最低に」

昨年の平成八年（一九九六）七月七日朝刊（朝日新聞）一面トップの見出しだす。

再び新聞記事を紹介することから始めたいと思います。

(1) 子ども同士の豊かな関係を

前年に生まれた子どもの数が百十八万七千六十七人にとどまり、現在の統計方法が導入された明治三十二年（一八九九）以来最低になつた、との内容です。既に紹介したように、一人の女性が生涯に産む子どもの平均人数（合計特殊出生率）も史上最低の・四三に下がり、人口全体に占める子どもの比率が主要先進国の中で最低になつたとの解説もありました。



平成9年1月1日付 日本経済新聞朝刊

「出生数120万人台に増加

第2次ベビーブーム世代が出産時期入り

なお少子化傾向

前年（一九九六）に生まれた子どもが百二十万三千人で、過去最低の九五年を上回ったというのが前段の見出しの内容です。しかし、「第二次ベビーブーム世代が出産時期にさしかかったことによる増加に過ぎず、出生率を押し上げるほどではないとみており、少子化傾向には歯止めが掛かりそうにない」とも付け加えています。その理由は、出生数は前年より一万六千人増えたが、人口が増えているため、出生率（人口千人当たりの出生数）は「過去最低だった九三年、九五年に並ぶ九・六にとどまる見込み」とありました。これが中段と後段の見出しの内容です。

さらに本文中で「1・42人に下方修正」という中見出しを付けて、厚生省が九五年の合計特殊出生率の値を一・四三から一・四二に修正したことを伝えています。加えて、「日本の少子化傾向が、当初考えられていたより一層進んでいることが浮き彫

(1)子ども同士の豊かな関係を



りになつた」と述べるとともに、厚生省人口問題研究所の「九二年の見通しより実際は、一生結婚しない女性の割合が高まり、結婚した夫婦間の子供の数も減少傾向が続く」という見解を紹介し、「少子高齢化が加速度的に進みかねない状況だ」と結んでいます。「九一年の見通し」というのは、第一部で紹介した《図一-1》の(3)「二〇二五年の人口予測」のもとになつた推定データです。

子どもの減少がこれほど繰り返しだ大きく取り上げられる理由、あるいは少子化が生じた原因については、既に第一部で論じま

(1)子ども同士の豊かな関係を

した。それにもかかわらず、ここで再び少子化の現状を取り上げたのは、二つ理由があります。その一つは、これから述べます第二部の課題です。今と未来に生きる子どもたちに、一人の親として、また大人として、具体的なかかわり方を考えるために、少子化の推移にいつも関心をもつていただきたいからです。なぜか。これが二つ目の理由ですが、日本の少子化は、子どもの自立にとつて非常に困難な課題を提起しているからです。

子どもが自立するために最も必要なのは、大人の手でも学歴でもお金でもなく、同じ年の仲間や少し年の違う先輩や後輩です。

大人の目と手を離れて、互いに“学び合い、育ち合い、教え合う”ことによつてこそ、一人の人間として生きる力を培えるからです。ところが、少子化はこのような世界を子どもから奪ってしまいます。おまけに両親と二組の祖父母により、愛情と財布の中身が過度に与えられがちです。

その意味で、少子社会で子どもがたくましく育つための課題は、家庭の中の子ども

の数や育て方ではなく、家庭の外の子どもたちの互いの関係の豊かさです。いいかえれば、少子社会における子育ての最も重要で困難な課題は、いかに親も含めた大人が手を引くか、ということです。

このことを私に気づかせてくれたのが、私の四人の子どもたちです。

実は、私は一人っ子として生まれ育ちました。家は貧乏でしたが、当時としてはさまざまな意味で恵まれた子ども時代を過ごせたと思います。この点では、心から感謝しているものの、他方で、兄弟姉妹のいない寂しさ（わがまま？）を自分の子どもには味わわせたくない、との思いももつようになりました。これが少子時代に抗して次に紹介する二男二女の父親になつた理由です。

- | | |
|----|-----------------------|
| 長男 | 昭和五十二年（一九七七）十二月十六日生まれ |
| 長女 | 昭和五十六年（一九八一）八月二日生まれ |
| 次男 | 昭和五十八年（一九八三）五月十一日生まれ |
| 次女 | 昭和六十年（一九八五）四月十七日生まれ |

(2)変化する『学校のモノサシ』

この言葉の意味はいうまでもなく、ハンカチとティッシュペーパーを学校に持つていくことを忘れないように、ということです。なぜこんなことが重要と思われる方も多いでしよう。実は問題は次女ではなく上三人の入学時にありました。



はんかち ちりがみ もつたの

まず最初は、末っ子の次女が小学校入学直後に玄関のドアに、私が貼った言葉です。

(2)変化する『学校のモノサシ』

四人は子どもたちが互いに“学び合い、育ち合い、教え合う世界の不思議さ”を教えてくれる先生です。その先生が語った珠玉（？）の言葉の中から、私が研究者として発見し、父親として学んだことを紹介しながら、少子社会に人の子の親となる課題を考えてみたいと思います。

しかし、このように切磋琢磨（格闘？）する四人の世界は、少子社会の教育課題を研究する私には、貴重な発見の宝庫です。

もつとも、このような私の思いは、今のところ理解されていないようです。数の多さは熾烈な競争と悲鳴の温床、互いに支え合う愛に目覚めて親の苦労に感謝する日がくるには、時間がかかりそうです。

てくるのは「ぼく知らない」。親として、元気だけが取りえの子どもと思うしかありませんでした。

ところが、四歳下の長女の入学により理由がわかりました。帰宅するやいなや「お母さんのせいで叱られたのよ！」と妻に叫んだからです。チリガミ、ハンカチを持たずに入校し先生に注意された長女は（ここまで長男と同じ）、持たせなかつたお母さんが悪いと妻を責めたわけです。

長女は自分が良い子であることが当然と思っている子。ただし、親の手を借りなければ何もできない子もあります。

「あなたが可愛がりすぎたからよ」……これが妻の言い分です。

問題はハンカチ、チリガミです。不覚にも私も妻も、毎朝持ち物の検査があることを知らなかつたわけです。二人とも一応は田舎の優等生でしたが、服の袖そでを鼻汁で光らせた子どもでもありました。そのため、チリガミ、ハンカチが学校にとつてどれほど重要かを想像できませんでした。“学校という世界のモノサシ”が変化しているこ

とを長女の言葉が教えてくれたわけです。その結果わが家の教育はどうなつたか。

(3) 親の役割は「モノサシの発見」

これまで、長男が初めて持ち帰った通信簿の基本的生活習慣の欄が△印であつたこと。その原因が、私たち夫婦の子ども時代と異なり、持ち物を細かく検査する学校のモノサシの変化にあることを、長女の言葉で知つたことを紹介しました。

このような学校の変化に、上二人をうまく適応させられなかつた妻は、三人目の次男には、失敗を繰り返すまいと決意したようでした。そのため、つとめて何でも自分でできるようにしつけようとしたしました。その結果、次男はハンカチとチリガミを忘れなかつたでしようか。

子育てはそれほど甘いものではありません。努力はするのですが私に似て不器用な次男は、自分でやろうとすればするほど失敗ばかり。それを見て益々いらだつ妻の声

(3)親の役割は「モノサシの発見」

同じ親のもとに生まれ育った子どもでも、これだけ違うわけです。まして、学校の教室に集まつた子どもたちは、親も家庭もすべて異なります。それを、一人の教師が、同じ教科書で、同じ時間に、同じ規則のもとで教えることがどれほど大変なことか。手のかかる四人の子の親として、先生方に心から感謝します。

さらに、それは子どもの側から見れば、一つのモノサシで評価されることがいかに理不尽なことか、ということでもあります。このことは学校の問題のみではないと思います。私たちも親として、育児書やマスコミによる理想的な子ども像によつて、自分の子どもの性格や成長を評価していないでしようか。

ようです。

といつても忘ることは避けません。そこで考えたのが、先に紹介した入口のドアに「はんかち ちりがみ もつたの」と書いた紙を貼ることでした。

顔をみればメンデルの法則の見本のような四人ですが、性格は全く別。基本的生活習慣に遺伝子の力は及ばないようです。

が、毎朝、部屋中に響くのみでした。

このように呑氣な長男、わがままな長女、要領の悪い次男の姿を見ながら育つたのが四人目の次女です。どうすれば叱られないかを、知らず知らずのうちに身につけた



いかにその子にふさわしいモノサシを見いだすことができるか。これが、親の役割であることを、次女の言葉は教えてくれました。

(4) どんどん変わる子どもの能力

これまで、四人の子どもたちの性格の違いについて紹介してきましたが、その差は学校の勉強にも現れるようです。それを教えてくれたのが、次男が小学校二年のときについた次の言葉です。

一分たつたら教えて

仕事を終えて夜八時頃帰宅した私に、次男がストップウォッチを差し出して語りかけてきたのです。私は何のことかわからないままに、ストップウォッチを受け取りス

イッチを押しました。すると、次男はもう一方の手にもつていたカードをめくりながら、「ニイチガニ、ニニンガシ……」と猛スピードで言い始めたのです。掛け算の九九の練習でした。

私は驚きました。先に紹介したハンカチとチリガミと同様に、この九九の暗記においても、上二人には苦労したからです。実は長男と長女いづれも小学校二年の秋から暮れにかけて、毎晩風呂に入れながら九九を覚えさせるのが、父親としての私の役割でした。

しかし、長男が全部言えるようになつたのは、努力のかいなくクラスでビリから二番目。長女は少し早かつたものの、自分より遅い人が少ないことには変わりありませんでした。

ところが次男は自分で努力しているわけです。

子どもが自立するように、との妻のしつけの効果がやつと現れてきたと喜んだのですが、ことはそれほど単純ではありませんでした。妻の話によると、家庭では兄と姉

(5) "反抗"は正常な成長の証拠

どうも学校の勉強で測^{はか}れるのは、子どもの能力のほんの一部のようです。それも背丈と同じようにどんどん変わります。そのため、わが子にふさわしいモノサシは一つでは足りません。おまけに、次々と新しい目盛りが必要になることを忘れないでいたいものです。

(5) "反抗"は正常な成長の証拠

しばらくぶりに出会った知人の子どもの大きさに驚いた経験のある方は多いと思います。

逆に、人から指摘されて初めて自分の子どもの成長に気づいた方も少なくないのでないでしょうか。

毎日顔を合わせることで、かえってわが子の成長の節目を見逃すことがあるようです。特に、父親の場合は鈍感になります。私も例外ではありませんでした。



のいじめと妻の叱咤^{しつた}にいじけるドジな次男も、教室では優等生。それも、ガリ勉タイプではなく、元気いっぱいのハツラツリーダー。その面子^{めんつ}にかけても九九暗記で一番になりましたかつたとのことでした。

私には、"家と学校に異なる次男がいる"としか思えませんでした。

いうまでもなく、どの子も間違いなく私と妻の子どもです。でも小学校の成績は次男が上でした。ただし今年入学した長男の大学での専攻は基礎工学、数学が得意だからです。逆に次男は中学の数学にとまどっているようす。

このことを教えてくれたのが次の長女の言葉です。

ちゃんとズボンをはいてください

長女が小学校五年の夏のことでした。風呂あがりに、いい気分で下着姿のまま涼んでいた私に向けた言葉です。

その語気の鋭さに驚く私の耳元で、妻が「レディの前で失礼よ」とささやいてくれました。娘はいつのまにか私が入つていけない世界にいました。

一人の女性として扱われるからこそ、女性として生きることができます。一人の人間として扱われるからこそ、自立への道を歩むことができます。

思春期にある者に、子どもという見方や考え方でかかわることへの疑問符を、長女の言葉は教えてくれました。

さらに長男の次の言葉はより厳しいものでした。

そうやつてきめつけるからできなくなるんだ

長男が中学校三年、次男が小学校三年の冬休みのことでした。高性能の組み立て式リモコンレーシングカーをほしがる六歳下の次男に、できるわけがないと決めつけた私に対し、語気鋭く言い放った言葉です。

そこには、私の知っている楽天家の男の子に代わって、父親の理不尽な言葉を拒否し、弟の自立を助けようとする一人の若者がいました。

もし、私が二人の言葉を子どものくせにと一喝すればどうだつたでしょうか。二人は内心では反感をもちつつも、私の前では子どもを演じ続けるが、男と女として生きる場を別の世界に求めるようになり、私は益々二人の成長を知る機会を失う、という悪循環におちいつたはずです。

思春期とは男の子と女の子が“男と女”として自ら立つために、自分を育んでもくれ

(5)『反抗』は正常な成長の証拠

(6)創造し続けよう『親子の関係』

家庭教育とは、一言でいえば自分の子どもをどのように育てるか、ということだと 思います。その前提には、こうあつてほしいという親としての子どもの理想像がある でしよう。したがつて、家庭教育にとつて最も大事なことは、子どもの理想像の描き 方です。

たとえば、どこかに理想的な子ども像や子育ての方法があり、それを知ることが親 としてのあるべき姿思つていてる方がいないでしようか。マスコミで報道されるさま ざまな子どもの問題を基準にして、自分の子どものあり方を判断している方はいない でしようか。学校の成績に基づいて、自分の子どもの未来を評価している方はいない でしようか。

私が四人の子どもたちから学んだことは、子どもが成長するということは、親が描

た温かい世界を捨てようとあがく時期とい えます。その第一歩が親の庇護から自由に なることです。その意味で、思春期真っ盛 りの中学生が親に反抗するのは、むしろ正 常に成長している証拠と考えます。

問題は親の離れ方です。

子どもを測るモノサシを捨てるときがく ることを、大きな驚きと少しの寂しさとと もに、長男と長女が教えてくれました。蛇 足ですが、父親の呪縛から解放された次 男は、長男の助けを得ながらではあります が、見事にレーシングカーを組み立てたこ とを付記しておきます。



く子ども像を次々と破つて、そこからはみ出していく、ということでした。

家庭ではドジで失敗ばかりでも学校ではヒーローの次男のように、自分を表現する世界の変化に応じて全く異なる姿を示すのが子どもです。要領のよい次女のように、自分でも意識しないままにさまざまなことを学びとっているのが子どもです。

さらに、まえに紹介した長男と長女のように、親の子ども像を拒否することこそが、一人の人間として自立するための条件のはずです。

このことは、よき親であろうとすることが、かえって子どもの成長を止めてしまう可能性がある、ということでもあります。子どもは日々成長し、さまざまな場で多様な姿を現しているはずです。

それは一人の人間として生きるために準備をしているといえます。

しかし、そのことに気づかずに、可愛いわが子のために、うちの子に限つて、まだまだ子どもよ、私がいなければ何もできないのよ……、と思い続けていいでしょ

うか。親の期待に応えて、"可愛い〇〇ちゃん"であり続けることを、強制していい

でしょうか。

親である私たちがわが子と共に成長し、子どもを見る目や子どもへのかかわり方のモノサシをいつも変化させようとしているかどうか。いいかえれば、"子どもとの間あいだ"



のあり方』を創造し続いているかどうか。これが未来を生きる子どもたちに対して、過去と現在を生きる親がとるべき責任と考えます。

子どもはいい子であればあるほど、親が成長しなければ、親の願う過去の自分の姿を演じ続けなければなりません。

子どもの自立を妨げているのはだれなのかを、改めて問い合わせてみてください。

(7)懸命に生きる姿のモデルに

「アーラ……今日は大変だったのよ、襖を破るは、物は投げるはで」
「そうか……、いよいよ始まつたか」

長男が中学一年の冬のことでした。研究室で原稿を書き上げ、夜十一時頃帰宅した私に、待ちかねたように語りかけてきた妻との会話です。

思春期真っ盛りの男の子がいる方は、何が起こったか想像できると思います。長男

が夕食の後、自分の部屋で宿題をしていると思つていたら急に暴れだし、手がつけられなかつた、ということでした。

何が起こつたのかわけがわからない、と妻は嘆きましたが、男の私には覚えがありました。中学時代に同様のことで母や祖母を困らせたからです。

そのため、「大丈夫だよ、正常に成長している証拠だから」と妻には強気でいたものの、内心はとまどっていました。わが家の家族構成や居住環境を考えれば、単純に私の子ども時代の経験を当てはめることができなかつたからです。
一人っ子の私の場合、母と祖母はひたすら嵐が過ぎ去るのを待つたようです。ただし、他の人に迷惑をかけることはありませんでした。

でも現在の家族は親子六人、それも三部屋しかない官舎での生活です。長男の暴発は、他の三人の子どもの生活に直接影響します。長男の顔色のみで動くわけにはいかないわけです。

そこで夫婦で話し合つて出した結論は、私が大学ではなく家で仕事（原稿執筆）を

することでした。

思春期とは、それまで子どもとして育てられた世界を一度否定して、一人の人間として自立するために、改めて自分らしさ（アイデンティティ）を求めてあがく時期といえます。その過程は、男の子が男に、女の子が女に成長するために、噴出する性的衝動にとまどうことでもあります。

そして、この時期に良くも悪くも母親は女性の、父親は男性のモデルになります。ところが、もし父親が仕事人間で家庭を顧みる余裕がなければどうなるでしょうか。子どもは最も身近な男性のモデルを見失うことになってしまいます。

私はたとえ仕事の効率が落ちても、父親の役割を果たすのは、今をおいてはないと考えました。

男の子が男になるために、思春期特有の感情にとまどう長男に対し、仕事をする姿を見ることにより、父親である前に一人の人間（男性）として懸命に生きるモデルになれるすることを願つたからです。

(8)互いの違い認め秩序づくり

思春期特有の感情にとまどう長男に対して、一人の人間（男性）として懸命に生きるモデルになることを願い、仕事（原稿執筆）場を大学の研究室から自宅に移したことを紹介しました。その結果わが家に平和は戻ったでしょうか。

現実の厳しさは私の予測をはるかに超えていました。

いざ仕事を始めてみて困惑しました。大学の先生といつても所詮は公務員です。

(8)互いの違い認め秩序づくり



この時期は、三LKの官舎の中に中一の長男、小三の長女、小一の次男、幼稚園年中の次女に私と妻が生活していました。この家族構成の中で仕事をすればどのような雰囲気になるかを想像してみてください。

結局は、妻と子どもたちの叫び声の合唱に、「うるさい、仕事にならん!」という私の怒鳴り声が重なつただけでした。

しかし、どんなにうるさくても締切りは待ってくれません。原稿が書けなければ収入が減り、生活がなりたたなくなります。そのため、再び妻と話し合い、子どもたちと相談することにしました。そして、(私の一方的 requirement の面もありましたが) 次のようならルールをつくりました。

まず、騒音のものになるテレビに対して次のルールを決めました。

「見る番組は自由、見る時間は制限」

「一日一時間、夜八時以降は土曜日だけ」

そして、四人それぞれ一週間に見る番組を申告させ、テレビの横に貼りました。

次に、私の仕事と長男の勉強に必要な静かさを確保するとともに、子どもたちが朝自分で起きることができるよう、小学生は九時半、幼稚園児は九時までに寝ることを原則にしました。

さらに、家族の中の役割を明確にし、長男は風呂の用意、長女は食事を運ぶ、次男は食後の片づけ、次女は玄関の靴の整理を分担しました。

そして、起きたときと寝るときは必ず挨拶することを約束しました。
いずれのルールも、私の仕事の邪魔になる騒音を減少させるため、という生活の必要に基づく家庭内の秩序づくりが目的です。子どもの“しつけ”のためにわざわざつくったものではありません。

ただ、この機会に生活の中の時間や役割を自分でコントロールできる力を子どもたちが身につけてくれれば、という思いもありました。

もつとも、実際には、私の仕事あるいは妻や子どもの都合で破られる日も少なくありませんでした。しかし、少なくとも親子六人が互いの違いを認め合いながら、自分

がしなければならない（したい）ことを狭い部屋で行うために必要なルールを、何とかつくってきたことも事実でした。

(9)情報共有、役割を明確化

長男の思春期を契機に、我が家で仕事をするようになったことにより、家族六人が狭い官舎で生活するためのルールがつくれたことを紹介しました。

しかし、読者の中には、「大学の先生だからできるのよ、民間のサラリーマンの家庭ではとても無理よ」と思われた方もおら



れるでしょう。確かに、わが家と同様の問題が生じた場合、私のような方法で対処できる方ばかりではないと思います。

でも、どんなに仕事が忙しいお父さんやお母さんでも、親として子どものことを知ろうとする意欲はもてるはずです。本当に子どもが親である自分を必要としていると判断したなら、その方法はさまざまでも、何とか応えようとするとするはずです。これが新たな生命をこの世に創造した者、すなわち人の親として生きる者の原則と考えます。

問題は家で仕事ができるかどうかではありません。『子どものいま』を知ろうとする“意欲”と自分の出番を見逃さない“センスと判断（決断）力”です。

しかし、それでもなおそんな余裕も時間もないといわれる方もおられるでしょう。実は私がそうでした。

昼間は講義や会議等で振り回され、やつと静かに考えられるのが夜の九時、そこから原稿を書き始めて夜中にわが家に帰る、という生活を続けていました。親子六人が生活できるために稼ぐこと、これが私の役割と考えていたからです。

その私が長男の思春期を契機に生活の転換を決断できたのは、夫婦の間に次の約束があつたからです。

- ①親として子どもに関する情報を共有する
- ②父母として互いの役割を明確にする
- ③夫婦として語り合う時間を毎日とる

まず、日々成長する子どもの変化を知ることが、親として責任を果たす第一歩。次いで、父と母として子どもへのかかわり方の原則を明確にすること。

わが家の場合、"日々の生活に必要なルール"の学習は妻の役割です。

そして、"命と差別と金銭"に関することを教えるのが私の役割です。この三つは人間として社会で生きるための"基本原則"だからです。

これに長男のおかげで仕事の世界と"多様な人が共に生きるためのルールづくり"

が加えられました。

そしてこのいずれもが、毎日、子どもたちが寝た後に、夏はビール、冬は熱燗あつかんを飲みながら夫婦で話をする、という習慣の中では培われたものでした。

(10) それぞれの家庭に独自の形

「先生はやはり父親は厳しく、母親は優しくあるべきとお考えですね」

これは、子育てに関する講演会で、何か質問はありませんか、と私が呼びかけたところ、年配の男性が語りかけてくれた内容です。

前節で紹介した、①子どもの情報を共有し、②父母の役割を明確化し、③毎日語り合う、という私たち夫婦の間の三つの約束について話したあとでのことでした。

私はとまどいました。この三つの約束を決めた目的は、あくまで父親が仕事を理由に子育てから逃げないことであつて、父と母の役割を固定的に考えることではなかつ

まず、先に紹介したように、妻が日常生活に必要なルール、私が「命」と「差別」と「金銭」に関する社会的ルールの学習を分担しています。理由は二つあります。その一つは、ルールによつて学習の仕方が異なることです。

もう一つは、家庭の中と外ではルールの内容が異なることです。

たとえば、ご飯の食べ方や言葉遣いなどの日々の生活に必要なルールは、子どもの身近にいて生活を共にする大人を通じて身につけることが重要です。また、生活に密着したルールであるため、あまり杓子定規^{しゃくしじょうき}に守ることを強制されると窮屈になってしまいます。時と場合によつて厳しくするが、少々間違つてもそれほど気にすることはないようなルールです。

一方、数は多くありませんが、人間である以上、どんなことがあつても守らなければならぬ原理・原則となるルールがあります。その代表が人の命や権利（人権）にかかわることです。これは子どもに対して、明確かつ厳格な言葉と態度によつて教えるべきルールです。

そのため、このような誤解を解き、各家庭独自の役割分担を考えるヒントにしていただくために、わが家の役割分担の根拠についてもう少し述べておきます。



たからです。

(II)右往左往した二、三十代



前節で、私が父親として子どもに対して責任をもつてているのは人の命や権利に関すること。

それはどんな場合も守るべき原理・原則であり、明確かつ厳格な言葉と態度で教えるべきである、と述べました。

しかし、これを読んで、さすがは大学の先生、さぞ立派な父親として、子どもに命の尊さや人権について教えているのである、と理解されたとすれば大いなる誤解です。現実はそんな甘いものではありませんでした。

多分、四十代後半の現在の私なら、そし

ただし、日常生活上のルールと異なり、このようなルールの存在を子どもに実感させる機会はそう多くありません。そのため、普段子どもと接していない大人でも担うことができます。むしろ、たまにではあっても、この人のいうことは絶対守らなければならぬ、と子どもが感じ取るようになれば成功です。

もうおわかりだと思います。わが家の役割分担は、母親だから身近な生活ルール、父親だから原理・原則というのではありません。我が家にて、妻が外で働いていれば、互いの役割は変わっていたでしょう。

実際に、我が家で仕事をするようになつて一番驚いたことは、いつのまにか子どもの態度や言葉遣いに対して、細々と口うるさく注文をつける自分を発見したことでした。

(II)右往左往した一、三十代

て大学生になつた長男に対してなら、それなりの言葉で話すことができると思ひます。

しかし、仕事との狭間はざまで父親のあり方がわからず右往左往した二十代から三十代にかけての私に、そんな力も余裕もありませんでした。

むしろ、私の父親論は、父親になりきれないわがまま息子が、子どもたちによつて親として育てられる過程をまとめたもの、といったほうが正しいでしょう。

第二部を「新しい親子の世界」と名づけた理由です。

とりわけ、人の命や権利にかかわるルールを教えてくれたのは長男と長女、学んだのは私のほうでした。

それは長女が小学生になつた年のことでした。

「今日ね、Aちゃんと友だちになつたの。Aちゃん、車いすにのつてんだよ」

小学校で行われた養護学校の子どもたちとの交流活動の話でした。私は目を輝かせて何のこだわりもなく話す長女に笑顔で応えながら、長男との苦い経験を思い出しました。

私が住む地域には総合病院や養護学校があり、車いすで行き来する人たちと路上で出会う機会が多くあります。

まだ小学校に入学する前の長男と二人で散歩しているときでした。車いすで来る人を見た長男が、突然その人を揶揄やゆする言葉をつぶやいたのです。

私は一瞬とまどい、あわてて叱りつけました。でもそれ以上、六歳の子どもに語りかける言葉を見いだせませんでした。

自分とは異なる人に関心をもつた子どもに、その人と違和感（差別感）なく交わる（コミュニケーション）手本を示すことができるかどうか。これが親が担うべき人権教育の基本です。

でも私はできませんでした。

長男の言葉へのとまどいは差別的表現よりも、差別される世界にかかわることを避けてきた私の心と態度があらわにされたことから生じたものでした。その私が父親として人の権利を息子に教えるためにいかに変わったか。

(12) "異質"との交わりが成長の契機

「正直にいえば、初めてここに来て患者さんを見たときは、思わず目を閉じそうになるほど怖く感じて、言葉もでませんでした」

これは静岡県ボランティア協会が毎年夏休みに主催するサマーショート・ボランティアの報告書の中の一節です。この活動に初めて参加した女子高校生の体験を綴つたものです。

前節で、車いすの人に向かた長男の言葉が、父親の私こそ、障害をもつ人との交流を妨げる壁をもつてることを自覚させてくれたことを紹介しました。しかし問題はここからです。どうすればこの私の思いを長男に伝えられるか。小学校入学前の子どもに、言葉のみでは困難だからです。

その答えを教えてくれたのが、先に紹介した女子高校生の体験でした。彼女のレポ

ートは、ハンディをもつ人たちが積極的に「生きる」ことに挑戦する姿に、彼女自身が「生きる」意味を学ぶことができたことへの感謝の言葉で終わっていました。

彼女以外にも、おじいさんやおばあさんとの交わりで「ありがとう」の言葉を発見した中学生。子どもたちから笑顔の心を教えてもらつた高校生。施設で働く看護婦や職員の人たちから仕事の意味と責任、そして人としての強さと優しさを学んだ大学生。このような体験レポートで報告書はいっぱいでした。

ヒトは人間として生まれるのではなく、



人間として育つといわれます。そのことを象徴するのが人間という漢字です。人と人の間にあつてはじめて人間であり、さまざまな人との出会いこそ、ヒトを人間に成長させる場であることを意味する漢字です。

それは、異質な人、違和感を感じる人との交わりこそ、最も豊かな人間形成の契機であることを示唆しています。

このように考えるとき、異質な他者と自分との間にある壁を自覚したときこそが、さまざまな人と共に生きができる人間としての力を育てるチャンスではないでしょうか。壁があること自体が問題ではなく、壁の存在を知らないままに育つことこそ問題です。

前節で紹介したように、長男が入学した小学校では隣接する養護学校との間で交流教育を実施しています。一年生になつた長男が、そこで出会つたS君と、私ではできなかつたハンディをもつ友との新たな『人の間^{あいだ}づくり』への道を歩んでいることに気づくのに、それほど時間はかかりませんでした。

(13) 父親の姿が見えていましたか

「アレッ！ お父さんがいる。ひさしぶりだね」

長男が小学校四年のときでした。私が大きなイベントのプロデュースを引き受け、半年以上にわたり帰宅が明け方という時期がありました。

そのイベントが終わり、久しぶりにわが家で家族と一緒に食事をしようと思い、食卓についたときに長男から出た言葉でした。

私のほうは毎晩（朝？）子どもたちの寝顔を見てから布団の中に入つていました。そのため、それほど離れていたという実感がありませんでした。

しかし、それはあくまで私の勝手な解釈であつたようです。静かに寝ることができるようにと、妻が私の寝床に子どもたちを近づけなかつたことも重なり、私の姿を見ることがなかつた長男にとつては当然の言葉でした。

からです。

実は私の父は、私が中学校に入学する直前の三月、戦地で患つた病^{やまい}の再発が原因で亡くなりました。思春期真っ盛りで、最も父親が必要なときでした。

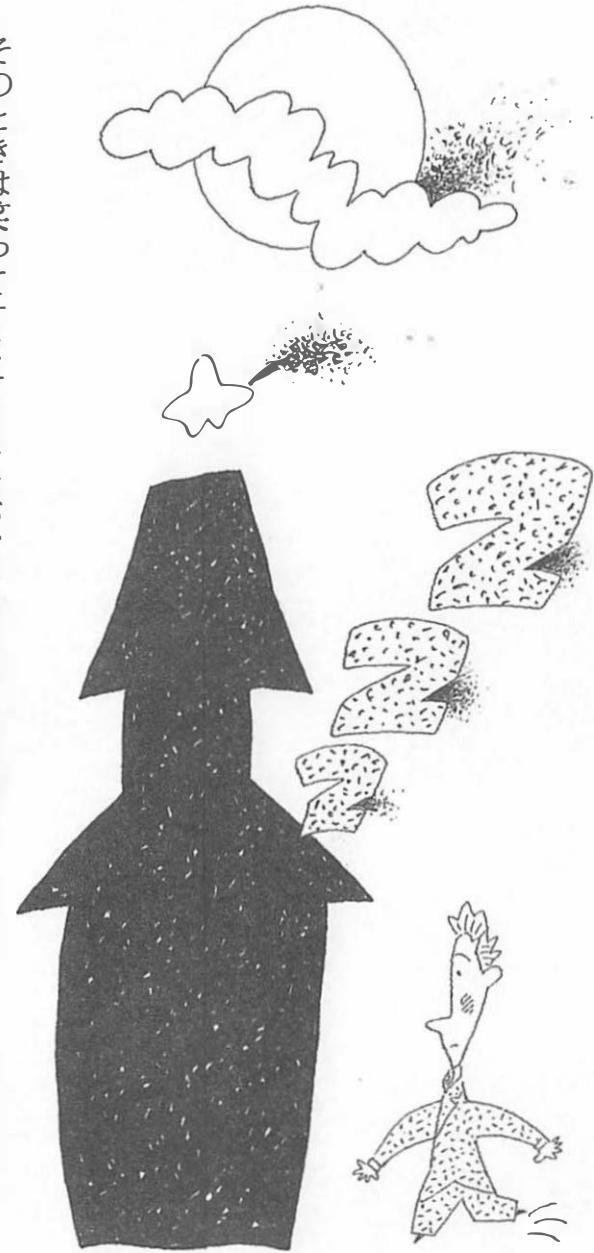
でも私は父がないことをほとんど意識することはませんでした。思春期ゆえの衝動にとまどい私に、父は人としてのあり方を示すモデルになってくれました。

母の言葉や行動や価値観の中に、父の姿を見いだすことができたからです。

それは、この年になつてふりかえつてみれば、多分に母の理想とする父親像であつたと思います。しかし、たとえそうであつても、母の思いを介绍了した父の姿を信じられたのは、どんなに遅くなつても父が帰るまで食事をしなかつた母の厳しさと、帰つてくれれば必ず私を膝の上に置いて頬ずりをしてくれた父の優しさが、私の心の芯^{しん}に刻まれていたからだと考えます。

これまで父親としての子どもへのかかわり方について、私自身の経験をもとに述べきました。でも、読者の中にはさまざまな事情で子どもと共に過ごす時間がどれな

そのときは笑つてすませましたが、子どもたちが寝静まつたあとでの妻との久しぶりの晩酌を交わす中で長男の言葉を思い出し、互いに反省しました。私の仕事の都合を優先するあまりに、父親の姿を子どもの前から消してしまつっていたことに気づいた



い方も多いと思います。

しかし、問題は物理的に見えないことではありません。私が失敗したように、それが子どもの心の中から父の姿を消してしまうことにつながるかどうかです。

そこで長男の言葉を契機に、私たち夫婦がどんな工夫をしたかを次に紹介します。

(14) 子どもとの“距離”を短くする工夫を

わが家の居間兼食堂には一辺百二十センチの正方形の食卓が置かれています。非常に頑丈なつくりで、真ん中に調理器具が収められたものです。夫婦で静岡市内のデパートすべての家具売り場を回り見つけました。

この食卓には、頑丈なだけが取りえの二人用の椅子一脚と一人用二脚が、セットでついていました。これに加えて、人間工学に基づき加工された背もたれ付きの椅子とひじ掛け付きの椅子を買いました。

頑丈な椅子は子どもたち、背もたれ付きは妻、ひじ掛け付きは私の椅子にするためでした。

前節で、半年ぶりに家族と食事をしようとした私に向けられた長男の「ひさしぶりだね」という言葉を契機に、どんなに忙しくても子どもの心の中から父親の姿を消してはならないと反省したこと述べました。その結果行つた工夫が食卓と椅子の購入でした。理由は二つあります。

一つは食卓を一般的な長方形ではなく正方形にしたことです。正方形であれば私と子どもたちとの距離が短くなり、家族六人全員が料理と一緒に囲んで食べることができます。

もう一つは、ひじ掛けの付いた通称“お父さんの椅子”的誕生です。あえて子どもより高級(?)な椅子にしたのは、自分たちを支える父親の位置を明確にするためでした。たとえ食事のときに父親がいなくても、その存在が椅子を通して子どもたちの心に意識されることを願つたからです。

しつかりした聖一君、
優しい優子さん、
かつこいい光二君、
かわいい貴子ちゃん、

(15)願いを形容詞に託して

らうちの家族ほどお父さんやお母さんと話をする家族はないね、といわれたときに、間違つていなかつたと思いました。
そして、子どもが寝静まつたあと、夏はビール、冬は熱燗を飲みながら、子どもたちのことについて互いの経験と思いをもとに語り合う夫婦の習慣が、この椅子と食卓とともに根づいたことも紹介しておきます。

ただし、現実はそれほど甘くはありませんでした。私のほうは父の威厳の象徴としてひじ掛け椅子を用意したつもりでしたが、子どもたちはもつとしたかでした。威厳よりも座り心地のよさに魅力を感じた様子。そのため問題は私がいないときにだれが座るかでした。結局は兄の権力（暴力？）が私の威儀より優先されたようでした。

その様子を妻から聞き安心しました。この椅子が、長男にとって父を超える踏み台になることを密かに願つていたからです。

実際にどれほどこの食卓と椅子が役立つたかわかりません。でも、ある日、長女か



新年おめでとうございます。

お父さんは隣の国の中中国にいます。

今年の目標を互いに教え合つて出発できることを願っています。

これは私が静岡県青年の船の講師として中国の青島チングタオを訪問した際に、四人の子どもたちに送った年賀電報の内容です。昭和六十一年（一九八六）の正月のことでした。

初めての外国旅行、それも元旦を挟んでの一週間の船旅。すべて初体験で緊張の連続でしたが、その中の楽しい思い出がこの年賀状です。理由は二つです。

その一つは、子どもたちへの年賀状はこれだけだからです。読者の皆さんの中にあっても、自分の子どもに年賀状を出した経験のある方はそう多くないと思います。新たな年の夢を一枚の葉書に託して、互いに伝え合い、人の間あいだを豊かにすることでの新年を祝う営み、これが年賀状の世界ではないでしょうか。その意味で、私は船から年賀電報を出せることを聞き、家庭では言いにくい父親としての思いを子どもたちに

伝えるよい機会と考えました。

でも、いざ考え始めるとなかなかよい言

葉が浮かびません。

何しろ長男が小学校四年、長女が幼稚園年長、次男が年少、次女は前年の四月に生まれたばかり。どう表現すればよいか悩みました。これが楽しい（今から思えば）思い出となつた二つ目の理由です。そしてなんだ末の電文が冒頭の言葉です。

私はこのメッセージに二つの意味を込めました。

その一つは、四人の一人ひとりが、その子にしかない良さをもつかけがえのない存



在であること。親は同じでも四人は全く異なる人格であり、それぞれ自分でしか表現できない世界を創造してほしい、という思いを名前の前の形容詞に託しました。

もう一つは、矛盾するようですが、個性の違いを互いに認め合い、支え合って生きてほしい、とりわけ長男に妹や弟の面倒をしつかりみてほしい、という意味です。

長男のみが電文を読む能力がある年齢であり、長女と次男は母親を通じて教えてもららうしかなく、次女は全く意味を理解しない幼児だからです。

そして、年上が年下のモデルになり、年下が年上をあこがれ、まねる、これが子どもたちの世界の豊かさの根源と考えたからです。

(16) 正月は絶好の機会

「ベトナムの大地を豊かにうるおすメコン川に行きました。世界地図で確かめてください。大きさがわかると思います。

でも実際に見て驚きました。川ではなく海に近い景色でした。

日本の川はどんな大きな川も向こう岸が見えます。メコン川は川の中にある島しか見えません。観光客のために船が出ていますが、島巡りが目的です。たくさん自動車を積んだフェリーボートも、向こう岸ではなく島に向かっています。

これらを見ながら、日本という国がいかに小さいかがよくわかりました。何よりも、日本の中だけで考えていると、他の国の人たちに理解されない危険性があることを実感しました」

これは平成八年（一九九六）の十二月に、調査のため訪れたベトナムのホーチミン市から子どもたちにあてた便りの一部です。

前節で、中国への旅で送った子どもたちへの年賀電報を紹介しました。それから十年、小学校四年の長男は大学一年に、幼稚園年長の長女は中学三年に、年少の次男は中学一年に、生まれたばかりの次女も小学五年生になり、それぞれ自分の道を歩み始めています。父親としては嬉しさと寂しさが入り交じった複雑な気分です。

そのため、初渡航から十年を経ての年末に訪問したベトナムでの出来事を、改めて子どもへのメッセージとして伝えようと考えました。

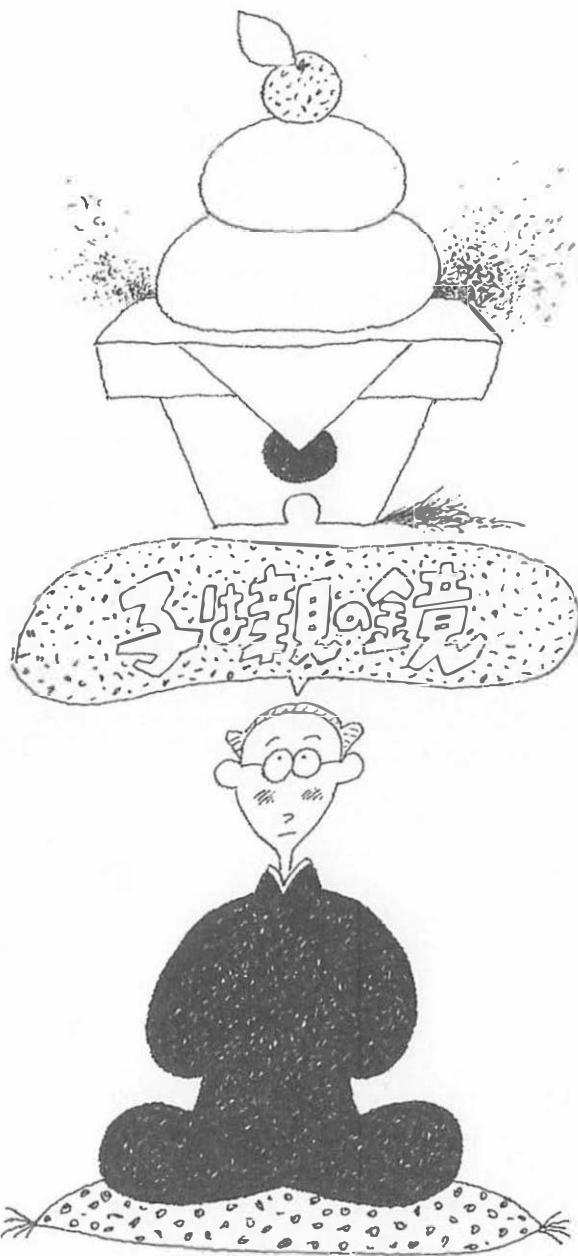
ただし、十年前の電文には、一人ひとりの健やかな育ちを願う“父の思い”を込めました。今回は、思春期にある若者に、”少し先を生きる人が贈る言葉”として送付しました。

ところで旅は未知の世界に身を置くことにより、普段の生活を省みて新たな生き方を見いだす“場”になると思います。正月も同じではないでしょうか。来し方を顧みて行く末に夢を描く“時”だからです。

その意味で、正月は新たな親子の世界を見いだす絶好の機会です。

ただし、忘れてはならないのは、子は親の鏡であること。通信簿の成績に一喜一憂する前に、子どもの良さをどれだけ見いだし育む親であったかを省みてください。テレビゲームに没頭する子どもを叱る前に、一人の人間として誇りをもつて生きる想いを語ってください。

私自身は大学の寮から戻る長男と共に、四人の兄弟姉妹がそれぞれ“人として生きる”二十一世紀の日本と世界のあるべき方向を考える“時と場”をもつことから、新たな年の歩みを始めたいと願っています。



(16)正月は絶好の機会

(17) 上がらぬ出生率、時代が求めるものは

二十一世紀まであと四年となつた正月を迎えた日のことです。本来なら希望あふれる未来を語るべきですが、残念ながらそんな気分になれませんでした。理由は次の記事です。

「一九九六年に生まれた赤ちゃんは百二十万三千人で二年ぶりに増えていることが厚生省の『人口動態統計の年間推計』でわかつた……しかし人口千人当たりの出生数は九・六人で、九三、九五年の最低記録と並び、出生数も九三年の百十八万八千二百八十二人に次いで三番目の低さとなり、少子化傾向は相変わらずだった」（「読売新聞」一九九七年一月一日）

問題は人口千人当たりの出生数（出生率）が上がらなかつたことです。

ちなみに、第一次ベビーブーム（団塊の世代）が始まつた四七年の出生率は三四・

三、第二次ベビーブーム（団塊ジュニア）の頂点の七三年は一七・一。大人の目を逃れて子どもたちが生きる知恵を互いに学びとる近所の仲間の数が、団塊の世代の四分の一、団塊ジュニアの二分の一に減つたわけです。

そのため、少子社会での親の課題は口や手の出し方ではなく、『子どもと子どもの間づくり』と考え、わが家の四人の小さな先生から学んだことを紹介してきました。

しかし、小学校も高学年になれば気になるのは豊かな人間関係よりも学校の成績。特に受験生がいる家庭では友だちと遊ぶなんてとんでもないと考えたい方も多いのではないかでしょうか。私も例外ではありません。実は私の気分を暗くしたもう一つの原因は、中三の長女が受験生だからです。

前節で、正月休みは寮から帰つた長男を含め家族で語り合ふと述べました。

しかし、やはり現実は厳しいものでした。ただし、長女のために家族一同が我慢する暗い正月……だからではありません。受験生であることを忘れ弟妹とのチャンネル争いに参加し、それに飽きたら久しぶりに家にいる天敵の長男と口ゲンカする長女の



日に繁華街で食事を終え、ほろ酔い気分でレストランを出たとたんに、子どもたちに囲まれたのです。最初は何が起きたかわからずとまどいましたが、よく見ると何かを買えといっている様子。いわゆるストリートチルドレンと呼ばれる子たちでした。事情がわかり改めて差し出す手を見て、とまどいは驚きに変わりました。その大きさ（小ささ？）は日本の小学校一、二年の生活科授業で出会った子どもと同じだったからです。

さらに翌日、友人と市内を歩いていると、昨晩より少し大きい子どもがココナッツ十

明るさと勉強ギライへの困惑が原因です。

でも他方で、四人のテンヤワニヤを楽しむ父親の日があることも事実です。その理由は、少子化のもう一つの側面である出生総数の減少により、学歴に代わる新たな能力が要求されることが確実だからです。そしてその能力は、受験勉強ではなく弟妹や兄と争う長女の明るさのほうに関係するからです。

(18) アジアに育つ若い力

前節で、元旦の新聞に掲載された「少子化傾向は相変わらず」との記事から、子どもの減少が学歴に代わる新たな能力、それも受験生であることを忘れて弟妹や兄と争う長女の明るさに関すると述べました。その理由を述べることがここでの課題ですが、それはベトナムでの体験に関係します。

実はベトナム初訪問は昨年六月（一九九六）のホーチミン市でした。その到着した

数個入りの籠を天秤棒で担いで笑顔で近よってきました。旅行者相手のココナッツ売りの少年です。ただし、日本なら当然小学校に行く時間。笑顔で数十キロを担ぐたましさと年齢とのギャップに、私の子ども像は混乱状態になりました。それが友人の次の言葉で日本の子どもたちへの“危惧”に転換しました。

「十年で変わるね」

ご存じの方も多いと思いますが、ベトナムはベトナム戦争終結後も、中国やカンボジアなど、国境を接する国と戦い続けました。だが今は、ドイモイ（刷新）政策により新興工業国への坂を上っています。でも、戦争で破壊された世界の修復はそう簡単ではありません。その象徴が、私が出会った子どもたちの現実でしょう。

しかし、考えてみれば五十年前の敗戦後の日本にも多くのストリートチルドレンがいました。美空ひばりのデビュー曲の“東京キッド”はいわば日本版ストリートチルドレンの世界を歌つたものです。

しかもこの子たちこそが、二度と破壊と飢えの世界に戻りたくないとの思いで働き

続け、経済大国日本の基盤を築いた世代です。日本の高度成長時代とは、この世代の二十代～三十代の時期と重なるからです。その意味で、今日の豊かさの源は日本版ストリートチルドレンのエネルギーにあるともいえます。

同じことが、私がホーチミン市の街角で出会った、したたかで生活力にあふれたベトナムの子どもたちにもいえるでしょう。もちろん、彼ら彼女らの現状を肯定するわけではありません。しかし、彼ら彼女らがベトナム社会を飛翔させる原動力となることも否定できないと考えます。

何よりも自覚すべきは、この人たちと十年後、二十年後にアジアを舞台に競争するのが、現代日本に育つ超少子世代、すなわち私たちの子どもです。さらに、ストリートチルドレンではなくとも、アジア各国には“生きる力”にあふれた同世代が次々と育つています。

この人たちとの競争に太刀打ちできる力を、日本の受験勉強でつけることができるでしょうか。

(19) 家族はどうかかわるか

先日、東京の出版社で、私も編集者の人である生活科教科書の編集会議がありました。内容は子どもの自立という観点から、家族の役割をどのように表現するかというものでした。

会議終了後の夜十時頃、電車を待つホームの上で、編集仲間のA先生のつぶやきが聞こえました。

「大変だつたけど教師を続けてよかつたわ……」

なんのことか気になり、私がその意味を問い合わせたところ、A先生は次のようなことを語ってくれました。それは家族の役割という編集会議での内容とかかわって、教師と母親という二つの役割を高校生の息子さんとの関係でどのように悩んできたか、という話でした。

これまで教師の仕事を優先し、わが子への手を抜かざるをえず、心配したが、かえつて何でも自分でできる高校生に育つてくれました。もし仕事がなければ手を出しすぎて、心配で夜十時に家にいないなんて考えられなかつたと思ひます。息子の親離れではなく母親の自分のほうの子離れが困難だつたでしょう……こんな話でした。

もつとも、今ではよかつたとは、以前は迷つたことを意味します。

母親、妻、教師の三役に加えて、選んだパートナーが一人息子のため、倒れた姑さんの世話を含めて、長男の嫁としての立場



に悩み、教師を続けるかどうかで何度も迷ったようです。ちなみに、私がA先生と一緒に編集会議をした場所からA先生のお宅まで約二時間かかります。お子さんは一人息子で高校生です。

ところで、読者のなかで生活科の授業をみた方がおられるでしょうか。多分、教室を出て廊下や中庭あるいは地域の公園で元気で活動する子どもを見て、これが勉強なの、と驚くと思います。いま学校では、生活科に限らず、従来の教科書を片手に教師が教室で教える授業を少なくして、教室の外で行う活動や体験を中心とした授業をやすすために努力をしています。

なぜでしょうか。答えのヒントはA先生の言葉と前回紹介したベトナムのたくましい子どもの姿です。

教師、母親、妻、嫁と一人何役もこなすA先生のエネルギーすべてを息子さんに向けた場合を想像してください。息子さんがA先生から自立するには、大変なエネルギーが必要でしょう。でも、A先生のような生き方は少数派、日本の母親の多くは子ども

のために仕事をやめたと思います。

他方、ベトナムの街角で観光客相手にココナッツを売る十歳前後の男の子は、既に自立（自活？）しています。むしろ、必要なのは学校の勉強とそれを可能にする親と家庭の力です。

日本の子どもはどうでしょうか。教室と家庭の中は豊かでも、親と教師から離れて一人で生きる力を身につけられるでしょうか。

(20) 看板、ゴミ箱、大型遊具

静岡県教育委員会の依頼により、社会教育委員として、姫路市にある「兵庫県立子ども館」への視察旅行に参加する機会を得ました。

しかし、正直あまり気が進みませんでした。

これまで、子どもや児童あるいは青少年といった言葉がついた施設を何度か訪問す

る機会がありました。でも、大人の勝手な思い込みばかりが目立ち、子どもが本当に求めているものに正面から応えた施設に出合えなかつたからです。

ところが、実際に訪問して驚きました。まさに“現在の子どもたち”の健やかな成



長を支えるために、最も必要な視点が見事に表現されました。

子どもの館はJR姫路駅からバスで市街地をぬけて約二十分、桜山湖畔を一望する地にある鉄筋コンクリートの建物。ただし、周りは緑豊かな自然ですが、館のほうは地肌のままのコンクリートで灰色一色。スッキリはしていますが、子どもの館というよりどこかの研究所のイメージ、というのが私の第一印象でした。

ところが、私たちを案内してくれた次長の大野さんの話を伺い、私は不明を恥じました。その代表が次の「六つのなし」というこの館のコンセプトです。

その一つは看板がないことです。あつてもコンクリートの地肌に溶け込むように控えめです。行きたい場所へは、自分の五感で探してほしいからです。

その二つはゴミ箱がないことです。自分で持ってきたものは自分で持つて帰る、といふ習慣を身につけてほしいからです。

その三つは大型遊具がないことです。ここは自然のすべてが遊具です。自然を相手に自分で工夫して遊んでほしいからです。

その四つは色がないことです。四季折々の自然の変化を感じ取り、自分で色をつけてほしいからです。

その五つは音がないことです。ただし、ないのは人工の音です。森の中の小鳥の鳴き声や風の音がもつてくる自然の豊かさを体験してほしいからです。

その六つは、自動販売機がないことです。安易にお金に頼るのではなく、前もつて用意する気配りをもつてほしいからです。

私は感動しました。この「六つのなし」こそ、常に大人の用意した世界の中で生きなければならぬ現代の子どもにとつて、最高の環境だと思ったからです。

でもそれだけに心配になりました。子どもよりも親のほうが耐えられるかを。

(2) 仲間づくり、ストレス発散の効用も

前節で、兵庫県立子どもの館のコンセプト「六つのなし」を紹介しました。



六つとは、①案内用の看板、②ゴミ箱、
③大型遊具、人工の④色彩と⑤音、⑥自動販売機のこと。いずれも子どもの豊かな育ちには不必要というわけです。

私はこのコンセプトに賛同しました。でも、これまでの経験から、子どもはともかく親が耐えられるかどうか心配になりました。

このような私の気持ちを察してか、館の次長の大野さんは次のように話してくれました。

「来館者の中には、何もない、と不満を述べる方もおられます。その都度、わたしど

もはこの“六つのなし”的意義についての話をさせていただきます。

なにもない、どうすればよいかわからない、そこから子どもの育ちが始まり、自分の足と目と声で目的地にたどりつく体験をもつてほしいからです。

もつとも、問い合わせてくるのはお父さんやお母さんのほうです。どうも体験的な活動が必要なのは子どもだけではないようです」

この話を伺つて私は改めて感動しました。子どもの豊かな育ちの最大のポイント（障害？）は親のあり方にあるとして、そのための“親育ちの場”となることが、この館の隠れた最も重要なコンセプトであることに気づいたからです。

このことと関連して、もう一つ気づいたことを紹介します。館の中で大型遊び器具が唯一置かれている場である乳幼児のための部屋を訪れた際のことです。

この部屋では、幼稚園にあがる前の年代の幼児が絨毯(じゅうたん)の上で寝ころがつたり、室内用のブランコや滑り台にしがみついたり、はい上がつたり、ころがりおちたりしていました。

ただし、紹介したいのはこの元気な子どもたちではありません。子どもたちの側でおしゃべりをしているお母さんの方の笑顔です。いずれも二十代半ばの若いお母さんでした。

どうもこの部屋の役割は子どもの遊び場だけではないようです。若いお母さんが互いに子育てを練習し合う場になつていています。また、初めてのお子さんの子育てで積もり積もつたストレスを一気に吹き飛ばす場でもあります。そして、何よりも大事なのは、親の仲間づくりの場になつていています。

育つためのモデルが必要なのは、子どもよりも初めての子育てでとまどう親のほうではないでしょうか。

(22) “総合性” “創造性” “自主性”

改めて、学校の勉強と子どもの育ちについて考えてみたいと思います。

実は、研究者としての私が最も関心をもつてているのは、現在の学校教育の内容や仕組みが二十一世紀を生きる子どもたちにふさわしいもののかどうかということです。

その理由の一つが、親のあり方です。早ければ入園前、遅くとも小学校の中学校年になれば、学校の成績を中心とした子どもの成長を考える方が多くなるからです。これまで紹介してきたように、私がベトナムの子どもたちのたくましさや、子どもの館の様子に関心をもつたのも、実はこのことが気になっていたからです。

もちろん、これは二十一世紀には学校が必要ない、ということではありません。現在のままの学校教育では、子どもが一人の人間として生きるために必要な力を培うためには不十分だということです。もともと、学校はそのようなことを目的につくられたのではない、といったほうが正確かもしません。

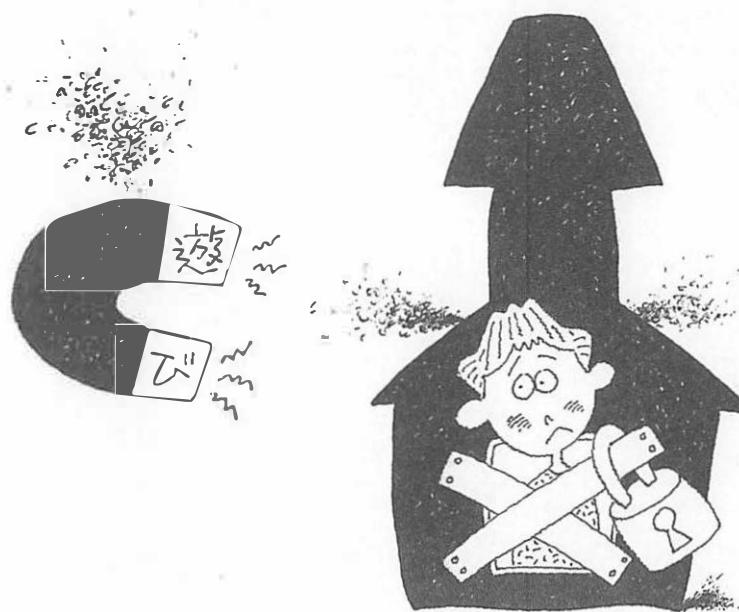
そのことを最も適切に表現するのが、「よく遊び、よく学べ」や「子どもは遊びの天才」という諺です。子どもの健やかな成長にとって、『遊び』と『勉強』の価値は同じということです。むしろ、語順を考えれば、『遊び』のほうが重要という意味が

含まれているのかもしれません。少なくとも、学校は『勉強』を専門に担当することを目的につくられました。『遊び』は学校の外の世界が担うことが前提でした。

しかし、もし家庭が学校の成績を中心に子どもの成長を考えるようになればどうなるでしょうか。『遊び』によつてしか身につけられない力を、子どもは失うことになります。私はその力を『総合性』『創造性』『自主性』『共同性』といった言葉で表現しています。

たとえば、子どもは遊ぶために自分の力を全力で發揮します。さまざまな機会に教

(22)『総合性』『創造性』『自主性』



えられ身につけた知識や技能を、生きて働く力として“総合し表現する”のが遊びの世界です。

また、子どもは遊びに必要なものは何とか手に入れ、遊びを妨げる問題は必死に解決しようとします。遊びは、子どもが必要に応じて新たな力を自ら生み出し、個性に即して独自の文化を“創造する世界”です。

さらに、“楽しさ”的な遊びはありません。もちろん遊びの常としてケンカや失敗や涙もあります。でも、このような友との交わりこそ、心の豊かさの源です。そしてそのいずれもが強制ではなく、子どもが互いに自ら進んで取り組むゆえに生じることです。遊びの“楽しさ”こそ“自主性”と“共同性”的の源です。

(23) 親のネットワークから

先日ある講演会で、前節で紹介した遊びの価値について話したところ、次のような

質問を受けました。

「先生のことはわかりますが、近所に友だちがないせいか、うちの子はテレビゲームばかりしていて外で遊びません。どうすればいいのでしょうか」

確かに問題は価値ではなく実際に遊ぶことができるかどうかです。ではどのような条件が遊びには必要でしょうか。

まず、遊びには大人の目を逃れて、子どもが互いに身体全体を懸命に使って表現し合う仲間と機会（時間）と場（空間）が必要です。また、子どもの生きる場は、大人と異なり、家庭と家庭の間に広がる身近な地域社会です。そのため、この“仲間、空間、時間”という“三つの間”を子どもの成長に応じて、家庭から地域社会へと、いかに広げるかが、遊びを豊かにするためのポイントです。

ただし、遊びの命は“楽しさ”です。むやみにテレビゲームを禁止して、外での遊びを強制しても、遊びではなくなります。

問題は子どもではなく親のほうです。ゲーム機を離さない子どもを心配する前に、

物や仕事の行き帰りに出会う近所の人たちに笑顔で声をかけてください。子どもの仲間は親のネットワークの広がりとともに生まれます。

子育ての仲間や先輩や後輩とその子どもたちこそ、わが子の遊び仲間のネットワークになるはずだからです。

また、休みの日には子どもといっしょに地域を歩いてください。その途中で、お子さんに、どこで、だれと、どんな遊びをしているかを聞いてください。親としてなすべきことが見えてくるはずです。

きれいな公園よりも、路地裏や空き地こそ子どもの遊びの世界です。その候補地が見つからなければ、歩行者天国のように、曜日と時間を限つて地域の道路の一部を子どもの遊び場に開放するアイディアを地域活動で提案してみてください。

さらに、テレビゲームでは味わえない、心と身体のすべてを使うことで初めて感得できる遊びの世界の醍醐味を、子どもと同じ日の高さで語り合ってください。これが少し（？）先を生きる人生の先輩としての親の最も重要な役割と考えます。



親としてどれだけ豊かな人間関係を身近な地域で培っているかを省みてください。

近所に子どもの友がないことを嘆く前に、子育てセミナーや家庭教育学級、あるいはPTAや子ども会など子どもとかかわる地域での活動に参加してください。買い

(24) 学歴社会と日本型経営が崩壊へ

読者の中には、お子さんと共に小学校への入学準備をしながら、入学式を希望あふれる思いで待たれている方もおられると思います。

その思いに水をさすようで申しわけないのですが、私の四人の子どもの経験では、それほど単純ではないと思います。入学早々の頃は元気で通学してくれれば、であつたのが、だんだんと成績が気になり、そろそろ塾に、と悩んでいるご家庭も多いのではないかでしょうか。実は最近、講演で受ける最も多い質問は次のようなものです。「先生、近所の子どもがみんな塾にいっているのですけど、塾へいかせたほうがよいのでしょうか」

私は次のように答えます。

「子どもが勉強に向いているなら、塾も一つの選択です。でもそのことで失われる世

界があることを忘れないでください」

子どもの成長に必要な世界という視点からみれば、学校も塾も同じです。“教師が、教科書を、教室で教える”世界だからです。

塾に通えば、そこで勉強した分、教科書に書かれた知識を理解（記憶）する時間は増えますが、しかしその代わり、“子どもたちが、多様な場で、自ら学びとする世界”が減ります。前々回紹介した「遊び」の世界で培われる総合性、創造性、主体性といった力が身につけにくくなるわけです。そして、現在の子どもたちが生きる未来が要求するのは、この「遊び」の世界の力です。

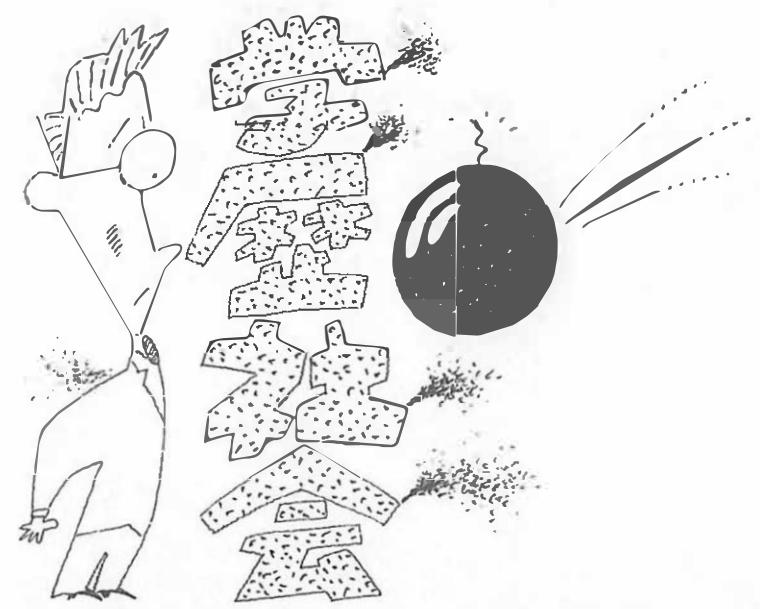
理由は、これまで何度も取り上げてきたように、子どもたちの数が極端に減少しているからです。

お子さんが小学生であれば、空いている教室が増えていることをご存じでしょう。子どもがいなくて廃園になつた幼稚園を知つておられるはずです。既に少子化の波は小学校から中学校に及び、やがて高校から大学に進みます。

齢化とセットです。今度はお父さんの世界の問題です。中高年の増加で、終身雇用と年功賃金に代表される日本型経営システムが破綻し、能力給（年俸制）による人事・給与体系に転換せざるをえなくなります。若いときは安い給料で働き、年とともに職階も上がり、それとともに給料も上がる、という仕組みは、若い人が多く年配者が少ない、というピラミッド型人口構造でのみ可能だからです。中年のリストラが要求される理由です。

そしてそれは日本の学歴社会が崩れることでもあります。考えてみてください。終身雇用だからこそ卒業後に入る企業のランクと結びついた大学が重要なのではないでしょか。多少犠牲を払つても銘柄大学に入学できれば人生が保障されるからです。その前提が崩れてくるのです。入学率アップも日本型経営システムの転換も二〇〇九年に突然生じるわけではありません。大学受験をゴールにおいて、教師が教室で教科書を教える授業が子どもたちの未来に何をもたらすかを問い合わせてください。

少なくとも、十代の一時期に、それもペーパーテストによる知識の記憶量を非常に



リクルートによる進路動向予測では、このままでは二〇〇九年に全員入学できる時代になるとのことです。十八歳になつた受験希望者の数と大学定員の数が同じになるわけです。そして、二〇〇九年に十八歳になる大学受験者とは現在の小学生です。

さらに、それまで、十八歳の人口は減少し続けます。当然、入学率は毎年確実にアップします。加えて、生き残りをかけた大学改革により、大学の定員はむしろ増加傾向にあります。全入時代はより早まる可能性があります。

他方、少子化はいうまでもなく人口の高

短い時間で競争して勝利する能力のみで、毎年新たな査定が要求される能力給のシステムにおいて希望の職場と収入を得ることは不可能でしょう。

(25) 大きな理想に生きる豊かな時間を

最近、少子化の問題を研究していく気になるのは、塾産業からのダイレクトメールや電話勧誘があまりにも多いことです。いよいよ生き残りをかけた競争が激しくなつたようです。ある雑誌に、生徒が千人以上いる塾が年間二十から三十社のペースで倒産する、との予想が出ていました。

でも、塾に行かなければ遅れるのでは、と不安に思っている方はまだ多いと思います。大都市では小学校四年から塾通いが常識、ということを友人のジャーナリストに聞きました。

私は憂鬱な気分になりました。早期受験準備→有名中学・高校→銘柄大学→銘柄職

場→生涯保証という図式を信じての塾通いであれば、明らかに間違いだからです。

理由は前節で述べました。銘柄大学入学と結びついた終身雇用十年功賃金制度は子どもが多い二十世紀型。高齢者が多い二十一世紀は契約雇用+能力給を中心に変わらざるをえません。

能力給で重要なのは、次々と新たな課題に挑戦する意欲と、その解決能力（個性）を積極的にアピールできること。ひたすら黙つてペーパーテストに挑むために鍛えた能力はマイナスに働く可能性があります。

時間をかけても独自のものを創造し、だれもが理解できるように表現する。どんな世界に行つても自分なりに生きることができ、だれとでも仲良くなれる。これが二十一世紀の社会で評価される能力です。もう既にその変化は始まっています。

これからは大競争時代（メガコンペティションエイジ）といわれています。世界とりわけアジア各国が日本のライバルです。舞台は国外、日本の学校での成績が通用しない社会です。異文化の人たちとの交渉で最も大事なのは自分の考えを明確に表現で

きること。失敗しても負けずに次々と明るく挑戦できる人が生き残れます。

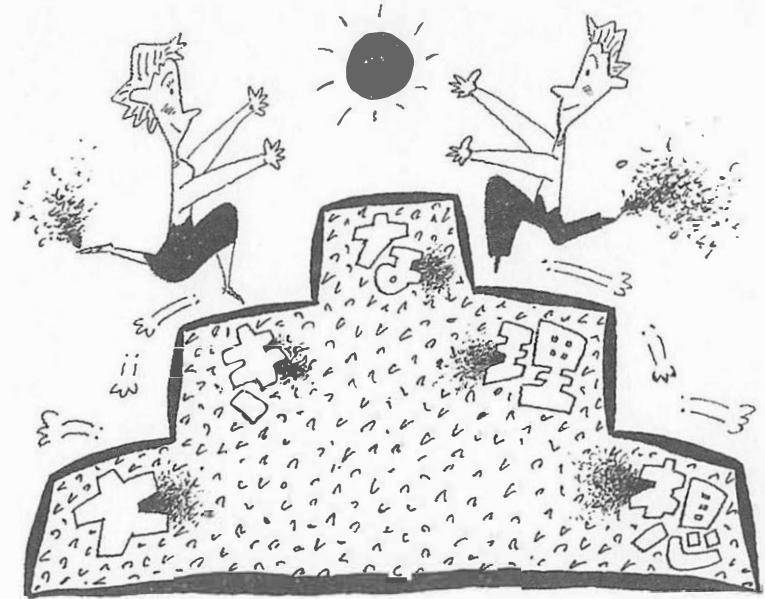
他方で人を憂える心と多様な人とともに生きる力、特に介護能力が大事です。日本は世界に類のない高齢社会になるからです。いずれも学校や塾が最も不得手とする能力の育成です。親の出番です。まず、一人の人間として、自分の目と耳で社会の変化を見据えて、未来からの使者の可能性を過去からの基準で判断していないかを省みてください。

そして、子どものほうではなく、親としての生き方を問い合わせてください。受験能

力は学校や塾の領域ですが、人間としての能力は命を与えた男女の責任です。それは言葉ではなく、自らの生き方で示すしかないと考えます。

子どもの幸せを願わない親はないでしょう。でも、それがわが子のみの幸せなんか、他の子どもたちと共に生きる望みなのかを考えてください。学歴や企業のランクではなく、人としてどれだけ誇りある生き方をしているかが最も重要です。

仕事を一生懸命することは大事です。でもそれが何のためかを子どもに伝えることを忘れないでください。仕事や生活の必要を超えて、より大きな理想のために生きる豊かな時間を創造してください。その懸命に生きる親の姿こそ、子どもが未来を生きる力を学びとる最も優れた機会であることを記して、結びの言葉とします。



〈参考文献〉

阿藤 誠編『先進諸国の人口問題—少子化と家族政策』東京大学出版会

馬居政幸著『なぜ子どもは「少年ジャンプ」が好きなのか』明治図書

馬居政幸・西田公昭監修『未来の静岡県をみつめて』若者たちは今 調査結果報告書』静

岡県女性総合センター

大橋照枝著『未婚化の社会学』日本放送出版協会

大淵寛著『少子化時代の日本経済』日本放送出版協会

落合恵美子著『21世紀家族へ』有斐閣

小宮山洋子著『家族からはじめる豊かな社会』青英舎

佐和隆光著『豊かさのゆくえ』岩波書店

角替弘志・馬居政幸編著『地域における生涯学習の課題』静岡県出版文化会

林 道義著『父性の復権』中央公論社

深谷昌志著『子どもの生活史』黎明書房

あとがき

私は昭和五十四年（一九七九）に二十九歳で静岡大学に赴任しました。最初の一年は妻が埼玉県の高校教師だつたため、単身赴任でした。長男が三歳になる直前の頃です。

「三つ子の魂、百まで」といわれるよう、この時期の父親の不在はマイナスとされます。でも、私はこの年に四人の子の父親として生きる基盤を培えたと考えています。単身赴任だからこそ、父である醍醐味を長男に教わることができたからです。

それは、赴任一ヶ月を経て、久しぶりに家族に会うため、新幹線、山の手線、私鉄と乗り継いで着いた埼玉県郊外にある駅を出た途端に生じた出来事でした。「オトーチャーン」と叫びながら、妻の運転する車の窓から身体を精一杯突き出して手をふる

あとがき

長男の姿が、私の目と耳に飛び込んできたのです。この瞬間、それまでの二十九年の人生で全く経験したことのない心の動きが沸き上がるのを止められませんでした。それは、一人っ子として人に何かをしてもらうことを当たり前として育つた私が、人のために生きることがより深い感動を生むということを初めて感得した瞬間でした。

いかに自分の時間とエネルギーがとられようとも、そのこと自体が喜びにかわる。親として与えることより、子どもからもらうことがいかに多いか。人の創造にかかわる喜びと感動の豊かさこそ、親として生きるエネルギーの源泉であること。

こんな父親としての心の経験を、静岡と埼玉を毎週往復する私に長男は与えてくれました。そして今も、四人の子どもたちから私はもらい続けています。その意味で、本書は私の単著ではなく、妻と四人の子どもたちとの共著です。加えて、生後二か月目から長男を預かってくれるとともに、未熟な夫婦に親となる心と技術を教えてくれた木村圭子さんを始めとして、私たち家族と“育ちの時間と空間”を共有してくれた多くの先輩の皆様との共著であることを述べて、感謝の意とさせていただきます。

さらに、このような私と家族の経験を文字に表現する勇気を持てたのは、静岡県教育委員会社会教育課が主催する家庭教育充実事業企画推進委員会の委員として、県内の数多くのお母さんやお父さんから、その智慧を直接学ぶことができたからです。また、静岡大学に赴任して以来、この委員をはじめ静岡県内の教育と行政の現場で学ぶ機会を次々と用意してくれた静岡大学教育学部長の角替弘志先生、同様に角替先生の推薦とはいえ三十すぎの若僧を委員に受け入れて研究者に育ててくれた北條博厚委員長（静岡県立子ども病院院長）や宮澤宏社会教育課長（現焼津市教育長）、あるいは指導主事の山田象三先生（現日本教育新聞静岡支局顧問）や成岡桂三先生（現志太幼稚園副園長）を始めとする代々の委員ならびに社会教育課の皆さん、さらには男女共同参画の視点から家庭教育の課題を教えていただいた静岡県女性総合センター所長の林のぶ先生と男女が共に創るしづおか推進懇話会座長の錦織淑子先生に心から感謝いたします。

さらに、より広く深い視野から子どもと親の課題を学ぶ機会を与えていただいた明日の家庭教育研究会（文部省婦人教育課）の渡邊秀樹座長（慶應義塾大学教授）や大西

珠枝課長を始めとする委員ならびに婦人教育課の皆さんに御礼申し上げます。

なお、本書の第一部は、「教育総研／『パムの会』事務局」が主催する「パム子育て講演会」で、平成六年（一九九四）五月に「なぜなぜもてる マンガ考現学」と題して行つた私の講演の記録を基に加筆したもの。また第二部は、昨年九月から今年四月にかけて、「聖教新聞」の教育欄に「少子時代の“親育ち”学」と題して週一回のペースで連載したものを再構成したもの。怠惰な私が「少子時代」の視点から本書を短期間にまとめられたのは、この二つの機会を与えてくれた教育総研と聖教新聞社のご配慮と応援していただいた読者の皆様の力によるものです。このことを記して感謝の言葉とさせていただきます。

最後に、このような構成で本書を出版することができたのは、全て第三文明社の秋田谷幸雄氏のご尽力によるものです。心から御礼申し上げます。

平成九年八月二十五日

馬居 政幸

●著者紹介

馬居政幸（うまい・まさゆき）

1949年、徳島県に生まれる。東京教育大学大学院博士課程教育学研究科中退。教育社会学専攻。現在、静岡大学教授。

著書に、『なぜ子どもは「少年ジャンプ」が好きなのか』（明治図書）、『地域における生涯学習の課題』（共編著 静岡県出版文化会）などがある。現在、「アジアをどう教えるか」を『現代教育科学』（明治図書）に連載中。他に、文部省明日の家庭教育研究会委員、静岡県社会教育委員、静岡市総合計画策定専門委員はじめ各種委員として活躍中。

灯台ブックス 113

少子時代の親子の世界

平成9年9月30日 初版第1刷発行

著者◎ 馬居政幸

発行者 多田省吾

発行所 株式会社 第三文明社

〒160 東京都新宿区三栄町9-3

電話 03（5269）7141（代）

振替 00150-3-117823

印刷所 株式会社 厚徳社

製本所 株式会社 豊文社

落丁・乱丁本はお取り替えいたします

1997 Printed in Japan

ISBN 4-476-02113-1